

随筆「音の細道」

「月日は百代の過客にして蘇りし楽曲に往きかふ年もまた旅人なり」
遠大な時の流れを詠む日本人の感性は、その真摯な眼差しに生きている。
遙かなる時空を越えて飛来する数多の音楽とオーディオの古今東西。
オーディオのロマンを売らんとし、音のセールスクラークを生業と
志す者は、自らその感性の研鑽を日々の勉めと諫めたらん事を望む。
されば世界の未知なる音を、己の足で探訪する旅人でありたいと願う。
彼の国からやって来る南蛮渡来の道具を手に異国の人情に思いを馳せよ。

作 川又利明

第56話「Art for artist!!」

プロローグ



Continuum Audio Laboratories というブランドネームをご存知の方は大変少ないだろう。私も昨年のインターナショナル・オーディオショーで一度見ただけであり、この作品がまさか私の手元に置かれるなどとは、あまりの価格に躊躇して期待していなかった。しかし、この存在が私のオーディオに対する好奇心と探究心をこれほどまでに刺激してくれるたことに感動し、日本のオーディオファイルに向けて詳細を伝えていくことが私の使命であると思い始めた。これまでアナログプレーヤーの設計の歴史の中では必ずと言っていいほど並外れた天才設計者が存在し、ある面では一大転機となる大発明をしてきたものだ。このメーカーでは、「シネクティクス」といわれる設計方法を採用し、それぞれの分野の優れた技術者たちを非常に高いレベルでコラボレーションさせ、予想以上のものを作り上げることに成功した。そして完成したのが世界最高峰超弩級アナログプレーヤー「Caliburn Analog Playback System」である。チーフ・デザイナーはマーク・ドーマン。オーディオと音楽をこよなく愛する彼は、1980年代から趣味として自分と友達のためにアナ

ログプレーヤーを設計し始めた。そのアナログプレーヤーの愛用者だったのが、現在 Continuum Audio の会長であるデービッド・ペイズだった。デービッドは音楽への情熱を持ったオーストラリアの芸術文化に多大な援助と影響を与えている、大変尊敬されている学者でありビジネスマンでもある。彼のビジネス対象は幅広く、バイオテクノロジー、不動産運用、ハイテク産業などがあるという。数年前、デービッドはマークに金に糸目を付けなかったらこのアナログプレーヤーのどこを改善するか問うたという。すると、マークはプラッターを改善するべきだと答えた。マークは専門分野である航空工学の仲間達とジョン・ヴェッズというマテリアル専門家と協力してマグネシウム合金でプラッターを鋳造し、さらに音響と航空宇宙工学の専門家であるニール・マクラ克蘭博士のコンピューターモデリングによって極限まで振動を抑えこんだプラッターを完成させた。デービッドはこの新しいプラッターによる音質改善に驚愕し、マークに同じような設計プロセスでアナログプレーヤーの全てを再設計するように依頼した。そして開発資金の出資を約束し Caliburn Analogue Playback System は誕生し、会長としてデービッド・ペイズ、設計長としてマーク・ドーマン、そして開発統括としてムラリー・ムルガスと一緒に Continuum Audio Laboratories は産声を上げた。

第一部「Continuum Audio Laboratories の設計哲学とは」

この一世紀もの間に培われてきたアナログプレーヤーの設計について凝り固まった固定概念を一から問い直すことから始めたという。Continuum では、アナログ機器がその潜在能力を十分に引き出していないいくつかの要因を発見した。この素朴な問いかけこそが Caliburn の設計哲学そのものとなっている。3D 人工知能の設計ツール (NASTRAN、DYTRAN、PATRAN、Reshape) を使用することによってアナログプレーヤーの動作に関する様々な真実が明らかになった。過去の技術的な歴史を調べて、Continuum が問題提起したのは以下のようなものだった。

1. どのような形と、材質 (プラスチック、鉄、石、木、セラミック、他) の組合せが有害な反響を減らすか？
2. 「フライホイール」効果を得るために、プлатターの周りを重くするとプлатターの反響特性はどんな影響を及ぼすか？
3. レコードとプлатターの間は、音質的にどのような材質と技術が最も適しているか？
4. 脚の取り付け方が、音質とシャーシの振動特性にどのような影響があるか？
5. 不要エネルギーを取り去ることはできるか？あるいはシステムにとって有害にならないように形に変えたり、移し変えたりすることはできるか？つまり、円錐形やゴム製 O リング、他のチューニング機器で不要エネルギーを取り去ることはできるのか？
6. 何がアナログプレーヤーのノイズや反響の最も大きな原因となっているのか？つまりそれは、モーターやベアリング、あるいは針とレコードとの間の相互作用なのか？
7. モーターの取り付け方は、どのような影響をターンテーブルに与えるのか？
8. リスニング中にバキュームポンプを動作させないようにするにはできるか？

これらはほんの一部の問題提起だが、一般的には良いとされている全ての設計基準が根本的なレベルで問い直されている。この問題提起こそが、Continuum の設計哲学そのものと言える。

そして、これらの問題提起から現実的な解決のために必要なのが究極の素材の追求だった。アナログプレーヤーの設計は、過去何十年にも渡って進化を遂げてきた。Continuum では既存のハイエンドアナログプレーヤーを分析し、それらの長所と短所を認識するところから始めたという。特に素材の物理的な性質に着眼し、アナログプレーヤーの音の特徴が、素材によって大きく影響していることが明らかになった。Continuum では、マテリアル専門家の John Vietz (ジョン・ヴェッツ) と共に、航空産業で使われる合成物加工技術と高度な製錬技術を駆使して、アナログプレーヤーとトーンアームの画期的な素材の開発に着手。吸収性と硬質性を設計に取り込むには、様々な材質 (カーボン混合物、木材、御影石、大理石等) によって異なる反応をする素材が必要であり、その結果誕生したのが複数の素材を添加したマグネシウムを原材料とした新しい混合物素材である。

素材の決定から次の段階は理想の形状を求めてということ、求めている吸収性と硬質性の究極の素材を手に入れた後、次なる目標はアナログプレーヤーの形状の最適化だった。形状が音響特性にどのようなインパクトを与えるかを理解するために、Continuum では、この分野で最も尊敬されている権威、Neil McLachlan 博士 (ニール・マクラクラン / オーストラリア・ベル社の創設者) に協力を要請。彼はフィナイト・エレメント・アナリシス (限定的要素分析) とよばれる技術を使い、三次元で、固形物の流動的な振動をコンピューターでモデル化した。Caliburn は「段階的方法による最適化」といわれている手法を用い、各段階での形状変化の連続に伴って起こる、設計の方向性をコンピューターが分析。そして次の段階での形状変化の度合いと方向性を計算する。これを何回も繰り返して最適な形状のアナログプレーヤーが完成したという。見えないところにかかったコストの大きさを物語るものだ。

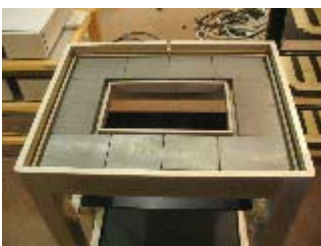
第二部「セットアップ体験で感動した Continuum Audio Laboratories の技術力!!」

私がこれまでに体験したアナログプレーヤーで思い出深いものがいくつかある。[Finial Technology の Laser Turntable の原理と誕生を、そして寺垣氏設計でセイコーエプソンが発売した 5000 を語っていたのはもう 11 年前。](#)そして、[Rockport Technology の Capella 2](#)に感動したのが三年後。更に [immedia の REVOLUTION turntable と connoisseur 3.0](#) が新しいアナログの世界を私に提供してくれた。しかし、それらとは一線を画する物凄さがあるが、もし完成された Analogue Playback System を目の前にしても、私は「ふう～ん、そういうものか～」程度にしか思わなかったかもしれない。それは 2006 年 8 月 2 日にやってきた。車一台では積みきれないという各アッセンブリーの物量と今までの常識を覆す規模が、このプレーヤーが持つべくして持った開発への執念と情熱を物語るものだった。

以下の各写真をクリックして頂くと拡大されたものがダウンロードされます。ぜひご利用下さい。



Castellon Turntable Support Stand これだけで 480 万円、重量は何と 80Kg。73kg を超える Caliburn を振動から完璧にアイソレーションし、強烈な剛性と強度を誇る。航空機グレードのマグネシウム合金で作られた Castellon は、剛性をさらに増強するためにクロスブレストされ、Continuum のロゴである S 字ロゴを冠した中心軸に固定されている引き締めネジで張力をかけている。二人がかりで台車に乗せ、何往復もすることになる搬入の第一便としてこのフロアーに運び込まれてきた。凄い!!



ここまでやらなければいけないのか? と一人胸中でつぶやいた私は、簡単にこのプレーヤーシステムを外部に持ち出したいわけではない、あのステレオサウンド誌の取材もゼファンの試聴室に訪問する形で行ったという事情が察せられた。しかし、その驚きはスタンドの上部を覗き込むと呆れ顔になっていた自分に気がついた。なんと!!

このスタンドのトップにはこれだけのフェライトマグネットが敷き詰められていたのだ。ゼファンの担当者が「店長、時計危ないですから気をつけてください!!」と言われて私はたじろいでしまった。



これは自重 73Kg の Caliburn を強化 MDF のボードごと磁気フローティングさせるためのマグネットだという。上下が対になっているものを慎重に 4 人がかりで位置を合わせながら降ろしていくが、想像も絶する腕力を必要とする。強力なマグネットの同極を接近させようとしても、ぐりっぐりっとして逃げないようにして反発する感触を思い出して頂きたい。それをこれだけの物量のマグネットを対極させ反発しあうものを無理やりに正対させながら降ろしていくのだから物凄い。

この普通の人だったら生涯経験することはないだろう超強力な磁力の反発を何とか腕力で押さえ込むことに成功したのが次の写真だ。これは 4 人がかりの手で上面のボードが落ちないようにしているのではなく、反発力で飛び上がらないように押さえ付けているというものだ。大柄な大人一人分の重量をフローティングさせるだけの反発力なのだから、油断すると文字通り飛んでいってしまうので怪我をしかねないほどのエネルギーがここに働いているのだ。





この写真はぜひ拡大してみてください。エアフローティングは、空気が圧縮されれば圧縮されるほど硬くなる性質があるので共振周波数が高くなってしまいが、磁気フローティングの場合は、磁場が崩壊の状態に近づくほど共振周波数が低くなる性質がある。Castellon は、双方のフェライト磁石の間をギリギリのところまで浮かすように精密に調整しており、共鳴周波数は 2~3Hz ぐらいの理想的なレベルに設定されている。この写真で注目したいのは、載せた上側のボードから伸びるネジを切ったスチール製の 4 本のシャフトを四角い穴のコーナーにあてがって下からストッパーとなる丸い大きなナット状のパーツで固定しているところだ。



この状態はまだ上下のマグネットには相応の間隔があり、これにヘビー級のアッセンブリーを乗せていくことで次第に沈み込み落ち着いてくるのである。上下のボードにまだ隙間があるうちにやっておかねばならないのが、次の写真で見られるエアチューブを周囲に均等に埋め込んでいくという作業だ。この段階ではまだ空気は入れていない。そして、その上にご覧のように厚手のゴムシート、これも 7 ミリ厚もあるようなアルミパネル、更にゴムシートを敷き、やっとその上にマホガニーの美しい仕上げの強化 MDF ボードが乗せられるということになる。



この作業でも 30 分以上の時間がかかっており、生半可な移設が出来ないということも早くも思い知らされていた。この目に見えない内部構造を[同社のサイト](#)でもご確認頂きたい。さて、このようにあれほどのマグネットの物量が覆い隠されてアンティークな雰囲気を出す Castellon のトッププレートがこのように安定する。しかし、これだけではマグネットの反発力でストッパーの限界まで浮き上がっていると言うことだ。それを物語るのが次の写真。この状態でトッププレートの各コーナーを力づくで押さえるとマグネットの強力な反発が手応えとしてかえってくる。これほどの剛性を備えたスタンドを必要とすること。また、それ自体がフローティング構造となっており、振動をことごとくアイソレーションさせるという徹底した設計は前章の設計哲学の具現化といえるものだろう。



浮いたままのトッププレートはストッパーのシャフトによって弾ける限界点までテンションを張り詰めているのだが、この段階で Castellon 本体との隙間が均一になり、かつフレームと接触しないようにエアチューブに付属の空気入れでエアーを注入していく。このエアーの量も微妙な加減があり、何回か抜いたり注入したりを繰り返しながらベストポジションを作っていく。この段階でトッププレートの水平、すわり具合などを目視で確認し、ズレが発見され作業を前の段階まで戻してやり直すという手間をかけていた。このような感覚によるセッティングは輸入元のスタッフの技量に負うところだが、この価格ではセッティング料はユーザーには請求できないね、と私は冷やかしながら汗を流している担当者に軽口を叩いていた。やっとここまで来たか、という思いは更に次なる驚きへとつながっていく!!



この価格ではセッティング料はユーザーには請求できないね、と私は冷やかしながら汗を流している担当者に軽口を叩いていた。やっとここまで来たか、という思いは更に次なる驚きへとつながっていく!!



さあ、ここで登場するのが先ずモーターである。ご覧頂きたい!! この大きさにして存在感を。Continuumでは、いくつかの有名なブランドのモーターを試してみたが、アナログプレーヤーの音楽的な潜在能力をぎくしゃくした動きによって制限してしまっているとの結論に達したという。また、マルチモーター設計はどのように配置されていても、二つあるいは三つのモーターを持つことは結局振動の問題を悪化させるだけだという結論に至った。ベルトドライブ方式のマルチモーター駆動はプラッターを「安定化」させ得ないという結論に基づき、Caliburnのモーターは米国軍が高精度なモーションコントロールシステムに使用しているものを採用し、現在入手可能な製品の中で最新の技術を誇っている。そのモーターをベースにしてRF対策と機械的なノイズを最小限に抑えた振動しない非常に静かなモーターを新しく設計した。超重量級のプラッターを起動させるためのトルク、静粛で滑らかな回転、精密なピッチを生み出すため、別筐体のユニットでコントロールされたモーターは、圧倒的なレベルのパフォーマンスと動作制御を発揮する。他のどんな高価なアナログプレーヤーと比べても、Caliburnの“ZERO COGGING”テクノロジーは一線を画している。後述するが、何と38Kgという前代未聞のターンテーブル・プラッターとベアリングを動かすパワーが要求され、それはコンピューター制御によるスタート機能がプラッターのスムーズな回転の初動をサポートするものであり、同時に高精度なピッチコントロールとスピード調整が可能でなければならない。この巨大なモーターはトリクル（維持）充電によるバッテリー駆動だというのだから更に驚いてしまった。



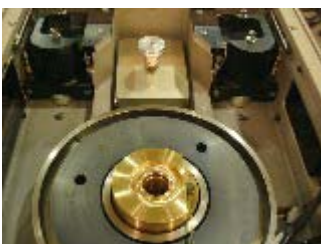
次に特徴的なのが、これほどのモーターであってもプレーヤー本体とは非接触であるということだ。次の写真でご覧頂けるようにCaliburnのターンテーブル本体は3個の分厚いディスクがスパイクを受けるようになっており、このように配置して次の作業を待つことになる。なお、前後の位置関係についてはフローティング構造であり奥行き方向の中心点にモーターをセットしている。



さて、ここで表れたのが台車に乗せたままのCaliburn本体だ。ご覧頂きたい!!前後左右のパネルの厚みと構造の重厚さ!!



Caliburnでは独自に設計したマグネシウム合金シャーシを採用。三点で支持された脚の位置は、軸受けが余分なエネルギーを分散させることができるように計算されている。Continuumのコンピューター解析によると、脚を隅に配置すると振動がシャーシ全体に広がるという結論に達し、独特の位置に配置している。更に恐ろしく太い軸受けを支えるため、コンピューターモデルで脚を適所に位置することによって、シャーシが上下方向の振幅運動からくるプラッターへの振動を最小限に抑える設計とした。コンピューターを使用しなくてもこれらのポイントを探し出すことは不可能ではないだろうが、多くの時間を費やしてしまい、シャーシにドリルで穴をたくさん開けなくてはならないので、やがては素材を台無しにしてしまうことだろう。Continuumではコンピューターモデルを使って正確な回答を得ることに世界で初めて成功。床からの振動と空中からの振動を最小限に食い止めながら38Kgのプラッターと相まって、サウンドステージの奥行きと高さに大きなアドバンテージをもたらしたという。約35KgのCaliburn本体を慎重にCastellonの上に乗せていく。先に置いたモーターがこのように所定の位置にぴたりと納まりほっと一息。しかし、まだまだ同社のテクノロジーは見えないところにこそ発揮されている。次だ!





さて、後ほど登場する超重量級のプラッターをいかに滑らかに回転させるかという技術がここに見られる。この写真は何と直径1インチという極太のセンタースピンドルシャフトを受けるベアリング部分を拡大したものだ。ここに小さな穴が開けられているのがお分かりだろうか。私が経験した多くのプレーヤーはスピンドルシャフトを受ける軸受け部にオイルバスを設けて、つまり一定量のオイルをベアリング部のシリンダー内部に充填し摩擦を軽減させるというものだったが、何と Caliburn では特殊な化学合成オイルをベストな状態を使用するために外部ポンプを使って循環させるという機構を取り込んでいる。この循環はコントロールユニットのバキュームスイッチをオフにするたびにポンプが駆動され、この穴から一定量のオイルが注ぎ込まれ、またベアリングの下から排出するというものだ。次の写真が Caliburn 本体の後方に設けられたフィルターを内蔵するオイルの貯蔵器である。組み立てが完了してしまってからでは決して見ることの出来ない貴重な画像だ。



さあ、いよいよそのセンタースピンドルシャフトが搬送用ケースから取り出されてやってきた。直径1インチと簡単に言えども、この太さと物量に剛性の追求が見て取れる。良く見るとシャフトの下のほうに周囲に切り込みが入れられ、そこにも小さな穴が見えるが、これがプラッター上でバキューム効果をもたらすための吸引用の空気穴だ。上部の更に太い部分でプラッターを受け止める一体型のセンタースピンドルシャフトは1インチという極太サイズで、ベアリングと接する面は平面で仕上げているが、その表面を適度に荒らすことによって油膜を維持するように設計されており、どのような状態でも油膜が切れることはない。通常、センタースピンドルシャフトは「ピカピカに

磨いた」状態が良いと思われがちだが、Continuum ではそういった表面は高速で回転するものだけに有効であると考えているという。このブロンズ製のベアリングに細い透明なパイプが接続されているが、これが循環させるオイルの注入用のものだ。そして、センタースピンドル



ルシャフトをベアリングに慎重に差し込んでいく。こんな太いののに何の抵抗もなく、するすると滑り込んでいく有様は精密加工の精度が極めて高いということを物語っている。私はいたずら半分にいったん差し込んだセンタースピンドルシャフトをつかんで持ち上げてみた。最初はこのパーツの質量がずしりと感じられ、いったん持ち直し力を入れ直して引き上げると嘘のようにスーッと引き上げられる。この安定感とスムーズさは一種の快感として手先に記憶された。更に、手を離せば重力に逆らわずに静かに滑らかに滑り込んでいく。ここで、ひとつご注目頂きたいのが、このベアリング周辺に見えるドーナツ型の黒いものだが、実はこれすべてフェライトマグネットなのである。何のためか!?



その答えが次の写真で、いよいよ 38Kg のプラッターが登場してくる。私もこれまでの体験で厚みのあるターンテーブルはいくつも見て聴いてきたが、これほどの質量を湛えるものにはお目にかかったことがない。さて、この下側、写真では左側面に見えるのがマグネットである。ベアリングの基部にあったものと同じであり、Castellon の磁気フローティングと同じ技術をここでも採用しているのだ。このマグネットの反発力によって軸受けの負荷を軽減させ、実質 38Kg を 2Kg 以下に押さえ込んでいる。他社のい

かなる高級プレーヤーでも軸受けの負荷が 2Kg ということはありえない。逆に言えば、高質量がそれだけ滑らかに回転するということであり、慣性質量も相当大きなものとなるはずだ。



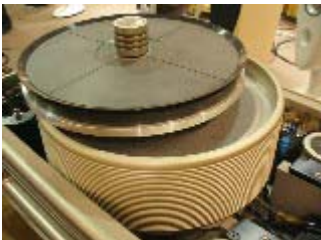
Continuum の考えでは、アナログプレーヤーのノイズの大きな原因はプラッター自体だとしている。33、45、78 回転で回るプラッターを支える軸受けが振動を作りだし、回転するプラッターが、増幅し、揺れ、いくつかの周波数の振動を生んでしまうという。Continuum では、NASTRAN FEA というソフトウェアを用いて、振動ノイズを図表化。形状の最適化、また素材の適切な選択によって外部および内部からの振動を完璧にアイソレーションしている。その結果を基に、マグネシウムとジルコニウムによる特殊合金塊から重量 38Kg という驚異的なプラッターが誕生した。ジルコニウムは内部で 5 面体構造となって全体の剛性を高め、共振を強力に抑えている。



さらに内部には低温処理された小さな球状の特殊樹脂が充填されている。この球体はチョコレートのように外側は硬く、中は柔らかくなっている。ぜひ左の写真を拡大して半透明に見える内部の充填材の質感を見て頂きたい。これも完成してしまったら見えないものだ。この写真で中心に見える穴がバキューム用の吸引孔である。その周囲に 4 個ある穴は後ほどサブプラッターというかバキューム機構がありレコードを直接載せることになるプラッターとベアリング機構をビス止めするためのものだ。



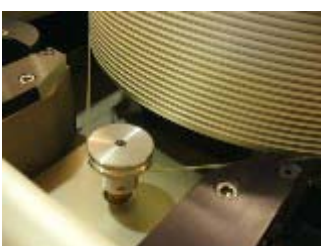
さあ、この 38Kg のメインプラッターも二人がかりで慎重にセットしていく。Caliburn に搭載されるとプラッターが半分内部に埋没する形になり、この分厚いプラッターは半分しか表面には現れていないことになる。これも完成してしまっただけで見られなかったものだ。概観だけを見ていては決してわからない物凄さだが、Caliburn のフロントパネルにあるスモークガラスを透かしてゆったり回転する下半分のプラッターを眺めることが出来る。



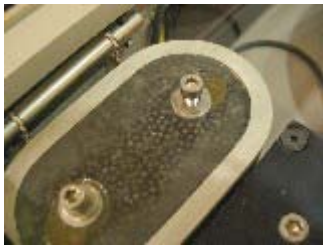
もうすぐプラッターの組み立ても一段落というところで、いよいよバキューム機構でレコード面と接するサブプラッターを乗せていくことになった。私の推測だが、このサブプラッターの表面は光沢のない黒で恐らくはマグネシウムで作られているのではと考えている。これを組み立てる前に、その裏側を見てみようと思つたのが次の写真。



センタースピンドルの上面がプラッターの中心に顔を出した形の上の写真ではバキューム用の穴はセンターに一個だったが、ここでは 4 個の更に小さい穴が吸引のための空気孔となっている。そして、レコードに接する黒い表面にある十字の細いスリットに細かい穴が多数あけられており、最終的には多数に分散した小さな吸引孔から空気が抜き取られるという仕組みだ。この状態でプラッター全体を指で回してみると、何と軽く回ることか!! 38Kg を指先一本で軽々と回せるという驚きがあり、しかも回し始める最初が物凄く軽い!!



Caliburn のプラッターは嘘のように抵抗感なく回る。凄い!! 最後にモーターとプラッターに特注で作られた Pyrrhane 素材のドライブベルトをかけて仕上げとなる。このベルトに触れてみたが意外に柔軟性があり、きつくテンションをかけてはおらずゆったりとかけられている。この後に実際にスタートさせると正速回転までの立ち上がりが大変早いのに驚く。本当に 38Kg をこんな柔らかいベルトで回しているのだろうかと思つきたい。これもコンピューター制御の賜物か!!



このプレーヤーはどこからどこまで驚きに満ちている、と言ったらオーバーだろう。これはアームベースなのだが、内部にはブラッターと同じ充填材が施されているのがお分かりだろう。実は、この楕円形のケースはフローティング構造となっている。但し、反発しあうマグネットの使い方ではなく、吸引力を利用している。この写真も拡大して頂きたいのだが、左上に金属シャフトに二本のワイヤーがかけられているのがお分かりだろうか。



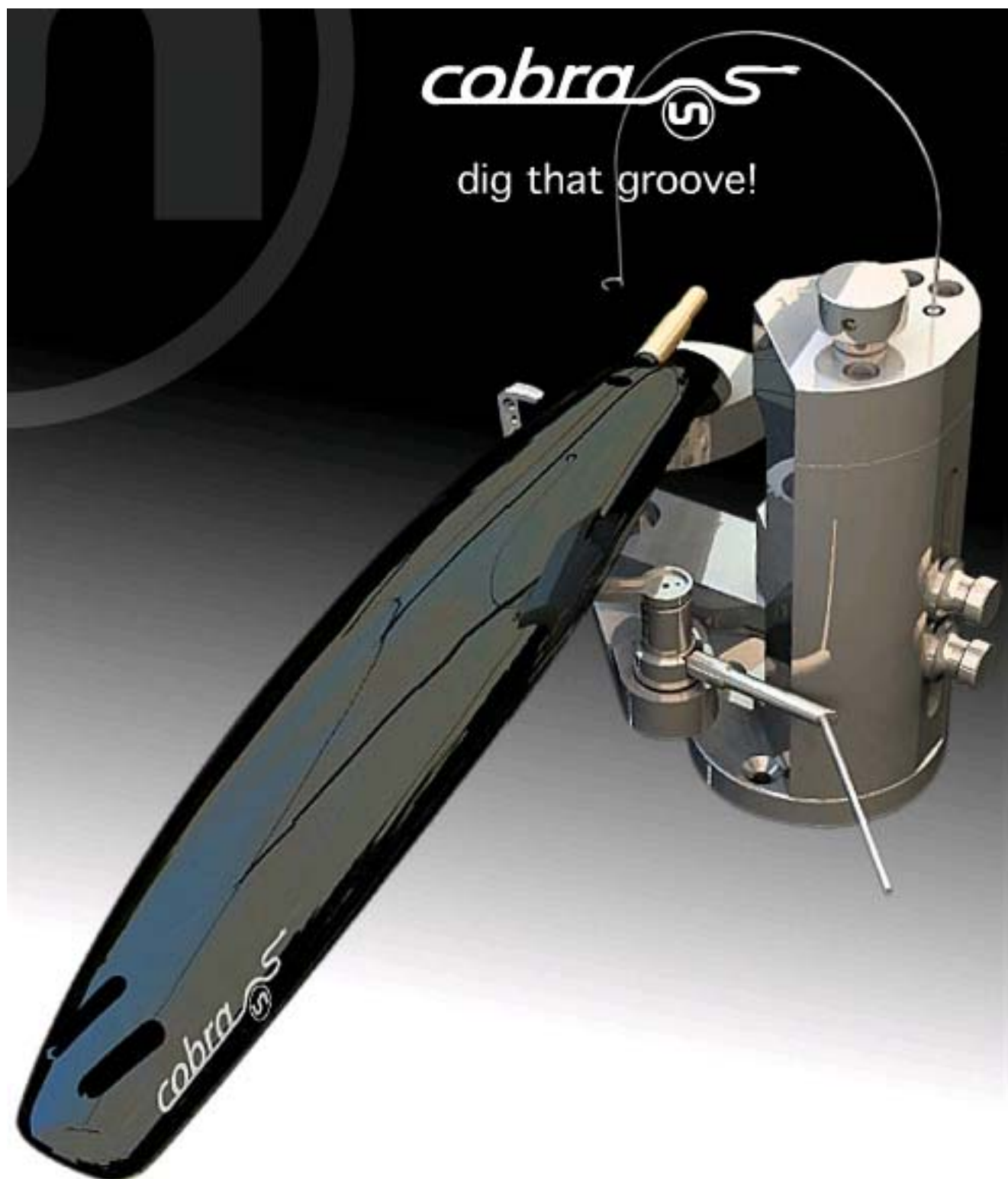
そのワイヤーのもう一端が右下に見える黒い金属パーツに固定されているのだが、このアームベースの下にマグネットがありシャーシにも同位置に吸引しあう極性のマグネットが取り付けられているのだ。そして、右上の金属シャフトをシャーシフレームに取り付けているビスの回転によってワイヤーを引っ張り、密着しあっていたマグネットがごくわずかに引き離された状態を作り出している。このようにアームベースそのものがシャーシからフローティングしているということも驚きのひとつだった。完璧なアイソレーションとはこのことか!! 左の写真はアームベースプレートで実際にはこの上にトーンアームがセットされる。これもマグネシウム合金製ということで、持ってみても大変軽く、しかし剛性は高い。問題点は加工がしにくく生産性が悪いということ。言い換えれば生産コストが割高になるということか。次の写真はいよいよアームベースプレートを取り付けた状態のもの。ここで私は面白い実験をした。このアームベースプレートは写真のように4本のビスでアームベースに固定するが、左右二枚のうち一枚はネジ止めを4箇所行い、もう一枚は奥のほうの2本のビスしか占めない状態があった。これで両方のアームベースプレートを指で弾いてみたのだ。すると当然ながら4箇所ビス止めしたほうは勢い良く爪で弾いても



「コンッ!! カツ!!」で終わってしまい、共振音はほぼない。しかし、2本しか固定していない方では「カーン!!」と残響音が残る。これだけの長さのアームベースプレートを片側だけしか固定しなければ、それは共振音も出るだろうと思いきや、2本ビス止めしたアームベースがフローティングしているのだ、ということに思いつく。鉄琴や木琴で叩く板がフェルトなどで機械的に固定せずに浮かせてあり、打音をきれいに響かせるようになっている。叩いた木琴を指で触れば音が止まってしまうということと同じ理屈である。指で叩いてからすぐ押さえると当然打音は止まるが、放っておけば響きはきれいに続く。フローティングしているということだがダンプはしていないので弾けば音がする。しかし、その打音の音色が澄んでいるように一定のトーンで好ましく共振がないということ、そして逆に考えればフローティング構造によって外部からの振動からは完璧にアイソレーションされているという実感が思われた。まあここまでやるかと呆れた!!



化粧パネルを乗せて Caliburn 本体の作業は一段落。そして、前ページの下の写真 4 枚は左からコントロールユニットとそのリアパネル。あの巨大なモーターにつなげる電極はモーターを単に回すだけではないというコントロール機能があるのでコネクタの数も多い。次はバキュームユニットとそのリアパネル。オイルリカバリーという端子はオイル循環用のエアポンプが圧搾空気を送り出すところ。それを受けて Caliburn 内部の特殊なリレーによってオイルの流れをコントロールする。ここまでオイルが流れているというものではない。さて...



印象的なデザインと画期的な技術力により単体で何と 300 万円という、私も初めてというトーンアームが「Cobra」である。組み立て作業を紹介する前に、その設計哲学を一通り知って頂くことで後々の解説が理解しやすくなると思った。次ページは輸入元の資料から...

Continuumでは、トーンアームも Caliburnと同じように NASTRAN FEA というソフトウェアを駆使し、まさにコブラのような斬新な形状のトーンアームを開発した。幅と高さが増すと、比例してその硬さも増すことを考えると、Cobraの形状は必需的なものといえるだろう。



Cobraは一見すると大きく、重そうに見えるが、実際はそうではなく、驚くほど軽量で特定の共振モードを持たない複合素材で構成されている。使用されている素材は酸化アルミニウム(セラミック)と植物繊維、そしてオーガニック素材という極めて斬新な素材を採用しているが、研究の結果、驚くべきことにこれらが一番好ましい特質を示したという。問題は、完璧なバランスを得るために可能な限り1ピースで製作することだったが、出来上がったのは非常に軽量な、しかし、大変に

硬質なヘッドシェルからカウンターウェイトまで一塊で形成されたアームとなった。もしCobraを曲げる力があるのなら、他のチタン製のアームやマグネシウム製のアームなどは折れてしまうほどだという。Cobraの硬さの秘密はなんといってもその独特の形状と材質にある。

今まで私が体験した高級プレーヤーとして GOLDMUND の Reference、Rockport Technology の Capella 2 など、リニアトラッキングアームを搭載するものが目立った印象がある。それに対して、Continuumはなぜオフセットアームにこだわったのだろうか?

リニアトラッキング方式は最終的な問題解決手段ではあるが、アームが直線の進行方向にピクピク揺れ動きながら進む「横歩き」の問題を決して避けることは出来ないという。そこでContinuumでは次のような独創的な「ワンポイント+スタビライザー方式」を採用した。

Cobraは基本的にはワンポイント方式の1点支持だが、すぐ横にサブニードルが設けられ、その針先は軸受け外周の滑らかに回転するボールベアリングの設けられた白いセラミックのディスクに接することで、支点のピボットを中心に弧を描くようにして動作する。

ワンポイント方式の持つ不安定さを解消し、極めて明確な音像描写を実現している。また、同時にラテラルバランスの調整を容易に行うことができるように、軸受けの周りに時計の文字盤のような彫刻を施した精密ネジを設けて、それを回転させることによって、サブニードルが載っている白いディスクが上下し、簡単にラテラルバランスを調整することができる。

高さ調整 VTA (ヴァーチカル・トラッキング・アングル) は、三角形の調整台の側面にある2つのロックネジを緩め、上部にあるツマミを回すことによって簡単に調整可能。これにより、情報量を劣化させる恐れのある、イモネジでシャフトに固定する方法の問題を解決している。

Cobraは前後にスライドさせる一般的なカウンターウェイト方式ではない。Cobraの目的はアームの中心の一定質量を保つこと。カウンターウェイトを前後にスライドさせてしまうと、質量を変化させてしまう。そこでCobraでは、最後尾に吊り下げるかたちでおむすび型のウェイトを取り付け、アームの質量を変化させることなく、簡単なおもりの加減方法でどんな重量のカートリッジにも対応する。また、針圧の微妙な調整は、アーム後方のノブスクリューを回すことで行うことができる。

特許申請中の糸つり式アンチスケーティング機能は、トラッキングフォースを円の外側で8%、円の内側で12%に増加させることによって、インサイドフォースの問題を独自に解決している。これにより、標準的なアームを使用したときレコードの最内周で見られる、荒っぽくなる音を和らげているという。



さあ、以上の予備知識を元に組み立て作業をご紹介していく。最初に Cobra の土台ともなるセンターシャフトを前述のアームベースプレートに取り付けている。Caliburn の化粧パネルにはこれを取り付けるための丸い穴が開いていたが、間違いなくフローティングされたアームベースと一体になっていることがわかる。しかし、これほどの質量と剛性のある台座を持つトーンアームがあったらどうか!!



Cobra 基幹ともなるメカニズムをその上にマウントする。この写真もぜひ拡大してみたいが、左側に見えるふたつのノブを調整することでアーム全体のハイトが簡単に調整できる。このような複雑な造形を作り出すのだからコストが高つくのは納得できるものであり、かつ妥協は微塵もないという設計哲学を更に思い知ることになる。



最初の写真で太いシャフトを取り付けたが、それが結果的に Cobra をどのように支持しているかがここで見られる。上記の二つのノブを締めこんで圧着させる対象というのが Cobra のワンポイントサポートの支点であるベースになるのだが、白い小さなリングが見られるところがそれだ。このように見事に機械的連結を行い、メカニカルアースを 8 ページで紹介しているアームベースに落としているのである。

トーンアームの支点方式で最も多いのがジンバルサポート、これは水平垂直の支点を 4 箇所持っており、各々 2 本のニードルと二個の軸受けで可動部を構成する。SME のようなナイフエッジ、サエクのようなダブルナイフエッジ、なども懐かしく思い出される。しかし、近代の高級トーンアームで最も採用例が多いのでワンポイントサポート方式だろう。Immedia や Graham Engineering などは私も扱ったことがあり、そのパフォーマンスの素晴らしさは十分に納得しているものである。しかし、ワンポイントサポートは克服すべき宿命的な課題というか弱点がある。支持点がひとつということで初動感度は大変よくなるが、アームの先端で発生するカンチレバーの反作用で発生する共振をどうにかしてダンピングする必要がある。

だから事例を挙げた各社の製品はみなオイルダンピングを行い、アームの共振を抑制する機構を搭載することになる。もちろん、これらを入念な設計とセッティングにより実害なきものとしたのが前記に上げたメーカーなのだが、Cobra にはオイルダンプは採用していない。そんなことでいいのだろうか、という疑問には逆に他社のトーンアームの素材というところに着目すると答えが見えてくる。アルミニウム、チタン、マグネシウムなどほぼすべてのメーカーは金属系の素材でトーンアームを作っている。軽質量・高剛性という要求には応じられるが、金属系の単一素材ではどうしても共振モードを取り去ることは出来ない。だからこそ、アームの可動部の一部をオイルバスにつけることで流体力学を応用し低速反応には抵抗なく高速反応には抵抗を大きくするという事でダンピングを行なわなければならないのだ。

しかし、Cobra の優雅なカーブを構成している素材は何か? 前ページの資料から酸化アルミニウム(セラミック)と植物繊維、そしてオーガニック(有機質)素材だということだから驚いてしまう。日本に 1 本しかない Cobra を実際に扱って、その軽量さに驚き、爪で軽く叩くと「コッ!!コッ!!」という乾いた音がする。Cobra の中身は中空になっているのだが、その中で共鳴して打音が尾を引くことはない。ダンピングしなくてもいいワンポイント・ニードルサポートのアームに私は始めて対面した!! 素材がダンピングを不要としたということだから、画期的かつ開発努力の物凄さがうかがい知れる。前例なきものを作り出すこと、ここに最もコストがかかることは誰もが納得するだろう。



そして、前頁のニードルの部分を拡大したのがこの写真だ。上から見下ろしたものとニードルの形状がわかりやすいように斜めから撮影したものの二枚を拡大してご覧頂きたい。さて、ここで思い出して頂きたいのは、前述のようにおなじワンプointサポート方式の [Immedia の RPM](#) や [Graham Engineering](#)、国産ではオーディオクラフトなどのアームはピボットの支点がすべてアームの頂点に位置しているということだ。つまり、アームパイプとカウンターウェイトをつなぐアームの重心位置で、それらよりも高い位置にニードルとピボットがあり、アームパイプとカウンターウェイトを“やじるべえ”の重りのような関係を作り出している。しかし、Cobraはどうか!?

他社のアームのように、パイプと支点部とウェイトという三つのパーツをつなぎ合わせている構造ではなく完全な一体成型であり、これは幅と高さが大きくなれば比例して硬さ・強度も大きくなるという、しごく単純な原理をモデリングした結果だという。それも道理だ。同じ太さの細いパイプに対してかかる応力に対する強度はどうかといえば、それは真ん中が膨らんだ形状の方が丈夫なのに決まっている。そう、Cobraの特徴は前述の素材だけではなく、この独特な形状にも大きく表れている。そして、その構造があるがため、驚くべきことにピボットの支点はアームの下側にあるということだ。しかし、同様に支点の両端に位置するメインウェイトとピックアップカートリッジは“やじるべえ”と同様に支点の下に位置するという巧妙な設計となっている。さて、この写真にある白いドーナツ型のリングだが、実はこの下には精巧なボールベアリングが仕込まれていて、指先で触れると何の抵抗もなく軽く回転するようになっている。更に、その外周にある刻みのある金属製のリングも回転するようになっており、回すとヘリコイド状に白いリングが上下するようになっている。なぜか!?



さあ、Cobraのアーム本体をセットする前に上記のニードルを受けるピボット部分を見てみよう。10ページの解説にもあるように、Cobraのアーム本体の質量を変えずカウンターウェイトを装備するというので、このような独特な形のケースとビスで止めたディスクによるウェイトを構成して入る。恐らく、このビスを外してディスクの枚数を変化させることでカートリッジの交換に際に荷重を調整するのだろう。



次に軸受けのピボットの部分がこの左の写真だが、これもぜひ拡大してみたい。扇型の中心にあるのがニードルを受ける部分だが、その中に鈍く青く光るものが見えるが、恐らくサファイアだと思われるピボットがある。ここで注目して欲しいのは、Cobraのアームそのものは上記の下から上を向いているニードルによって支えられるのだが、逆にその軸受け部から下に向かって小さなニードルが取り付けられている。これが前ページの問いかけの答えになるものであり、実際に Cobra のアームをピボットに乗せたところをクローズアップしたのが右の写真である。下を向いている小さなサブニードルが前述の回転する白いリングに接しているのがお分かりだろうか。横から見ると白いリングの外周にある刻みのある金属製リングの位置関係がよくお分かり頂けることと思うが、これを回転させることによって白いリングが上下して Cobra 本体を支えるニードルの他にサブニードルとしてもうひとつの接点を形作ることになる。

このサブニードルの役目は Cobra のラテラルバランスの調整ということがひとつ。右の写真を見てお分かりのように、微妙にサブニードルを持ち上げる形になるので 1 点指示のために起こりえる Cobra を正面から見た時の左右の傾きを調整するということである。他のメーカーではラテラルバランスはアームと直角の方向へ移動するウェイトの位置調整で行なっているが、こんな精巧なベアリングを使用するという妥協のなさには頭が下がる思いがある。

しかし、実はこのサブニードルの存在はラテラルバランス調整だけではないのだ。ワンポイントサポートの宿命である共振発生を、Cobra は NASTRAN FEA というソフトウェアを駆使してモデリングし、素材と形状によって共振モードを駆逐したと述べているが、実は第三の要素がここにあった。この回転する白いリングは多分セラミックではないかと思うが、その下にある精巧なボールベアリングには当然何らかの潤滑材を使用しているものと考えられ、リングに接触しているサブニードルから振動が伝わったとしても十分にそれを吸収してくれる。Cobra の安定性を高める有効なスタビライザー効果を狙っているということだ。なるほど、Cobra 自身はサファイアの軸受けで最高の初動感度を有しているが、それ自身に何もダンピングをする必要はなくとも安定性を向上させるために Cobra の手すり!?!のようなしかけがここにあったのだ。確かにワンポイントサポートの感度は素晴らしいが、何らかの要因で微妙に振動したとしても、それ自身にダンピング機構を持たないので振動を止めることはできない。それをこんな仕掛けでクリアーしているのだから、従来のトーンアームの設計、発想とは根本的に次元が違うということを実感させられた!! 我ながら「Cobra の手すり」とは言いえて妙な感じだが、普段は自立している Cobra がいざという時につかまりたいものということか。



さあ、ここまでに必要なセッティングの時間はざっと 4 時間程度。輸入元でもメーカーの人たちが試聴室にセッティングしたときの物々しさから外部に持ち出すことに躊躇していたことが納得できるものだった。今までのアナログプレーヤーの概念を変える規模の大きさ。そして、その中に投入された新技術には脱帽の思いである。なぜかと言えば、過去のプレーヤーの技術を延長したもの、よりレベルを高めたものという既定路線の追求ではなく、むしろ過去のテクノロジーをいったん白紙化して、Continuum は全く新しい発想とコンピューターを駆使したモデリングという他社が出来なかった開発を行なったということだろう。私はセッティングを完了して、とりあえずの音は確認したものの、第一印象での素晴らしさを語るのではなく、じっくりと試聴するのは以上のセッティングに関するレポートを書き終えてからと考えていた。さあ、いよいよこれから本格的な試聴に取り組んでいこう。高まる胸を押さえて試聴室に向かう!!

第三部「この私が始めて体験するアナログディスク未知との遭遇!!」



今まで我慢してきた Caliburn Analogue Playback System をいよいよ腰を据えて試聴しようとして、どんなシステム構成で聴き始めようかと考えたとき、これも私が今年になって最高に感動したコンポーネントをそのままに使用すべきだろうという気持ちがすぐに固まった。

もちろん、これだけのプレーヤーなので、この一例で終わりということもなく、今後世界中のハイエンドオーディオとここで共演していくことになるものだが、この試聴室にある他のコンポーネントとの組み合わせで、あれもこれもと取り替えていったらきりが無い。

当然あらゆる組み合わせで今後は末永く実演をしていくものだが、そのスタートとして私は最近の [Brief News](#) でも取り上げた [このスピーカー](#) をどうしても使いたかったのである。Avalon Acoustics Isis を中心に記念すべきデビューシステムとして次の構成で試聴が始まることにした!!



Caliburn Analogue Playback System-First impression system

[Caliburn Analogue Playback System](#) (税別 ¥17,000,000.)

And [Lyra Titan](#) (税別¥450,000.)

[VitusAudio SP-100 Phonostage](#) (税別¥2,630,000.)

[TRANSPARENT OPUS MM Balanced INTERCONNECT CABLE 2.0m](#) (税別 ¥2,400,000.)

[KRELL Evolusion Two](#) (税別 ¥5,900,000.) + [TRANSPARENT PLMM+PI8+PIMM](#)(税別¥996,000.)

KRELL CAST ケーブル

[KRELL Evolusion One](#) (税別 ¥7,400,000.) + [TRANSPARENT PLMM\(20A\)+PIMM](#)(税別¥606,000.)

[TRANSPARENT Reference MM Speaker Cable 2.4m](#) (税別 ¥2,480,000.)

[Avalon Acoustics " Isis "](#) (税別 ¥8,500,000.)

どうしても私がじっくりと試聴しようとするとう閉店後になってしまうのが常であるが、今回の試聴は何かと何かを比較するという主旨のものではない。と言うよりも、Caliburnと比較しうるものが見当たらないということだろうか。私は上記のシステムでCaliburnを体験することで、それが何を訴えてくれるのか、演奏と対峙してのイメージを過去のアナログ再生の記憶と照らし合わせることはあるかもしれないが、CDのように積極的にトラックを飛ばして楽音の各論で評価するという次元ではないようだ。さあ、その選曲はどうするか？



今からちょうど 20 年前に祖国ベルギーの首都ブリュッセルで心臓発作のために他界した 20 世紀における大ヴァイオリニストのひとりアルテュール・グリュミオー(Arthur Grumiaux)のこの一枚が私のバイブルともなっている。これから始めよう。アルテュール・グリュミオー/ソリスト・ロマンド/アルバト・ゲレッツ指揮による、バッハのヴァイオリン協奏曲第一番イ短調である。私がダイナミックオーディオに入社した 1978 年の録音であり、LPしかなかった当時から試聴盤として数えきれないくらい聴いてきたレコードである。演奏者のグリュミオーは 1921 年の生まれとされているので、彼が 57 歳のときの録音ということになる。近代注目される若手ヴァイオリン奏者の録音は、音階の移行を大変なスピードで繰り返す技巧が印象に残るのだが、このグリュミオーの演奏は趣が違う。職業的関心事から多くのクラシック音楽を聴いているが、私はクラシック音楽に造詣が深いわけではない。むしろ、お客様からクラシック音楽に関しては色々と教えて頂いているところが多い。この録音は超ハイファイという解像度最優先のものではないのだが、システムの分析にあたっては私のリファレンスとなっているものである。



まず、この写真のように LP レコードをターンテーブルに乗せて付属のスタビライザーを用意するが、実はこのスタビライザーの下に柔らかい半透明の吸盤をセンタースピンドルから落としこむ。これはバキュームの際に空気の漏れを防ぐものであり、その上にスタビライザーをねじ込むのだが、これは実質的にはレコード盤面を圧着することはない。というよりも必要がない。この写真を拡大して頂ければレコードのレーベルに薄いピンク色の吸盤が張り付いているのがお分かりになるだろう。次にコントロールユニットのバキュームスイッチをオンにする。ここで驚く!! シュッと音がしたのもつかの間、ほぼ瞬間的にバキュームは完了しレコードは完全にプラッターに密着する。このスピードが何と速いことか!! というのも私は 20 年以上前に国産のマイクロ、ラックスなどのバキューム式プレーヤーも扱い、Rockport Technology の Capella 2 など同様なバキュームタイプも使用してきたが、これほど瞬間的に吸引が完了するものなどなかった。そして、このバキュームがいったん完了すると演奏中にはバキューム用ポンプは必要がなければ動作しない。このバキューム状態のモニタリングをコンピューターが行っており、わずかな気圧変化があったときだけごく短時間ポンプを駆動する信号を発するという。従来のように絶えず吸引を続けなければならないというものとは全く違う機構であり設計のこだわりが凄い。

そして、次に驚くのが 38Kg もあるプラッターの立ち上がりだ。スタートスイッチを入れると一瞬の間を置いてからモーターの回転がはじまる。これは特殊な Pyrrhane 素材のドライブベルトが「キュルキュル」という音を出しながら、ゆったりとトルクをプラッターに伝え始める手応えから察することが出来る。すると、何と私の耳で観察したところモーターの回転から約 7-8 秒、ターンテーブルの回転をチェックすると三回転半で正速回転にまで立ち上がってくることがわかった。何と 38Kg をこんな短時間で立ち上げるというのもモーターの回転速度とトルクをコンピューターがコントロールしているという証なのだろう。これは凄い!

実際に扱ってみて Continuum は性能だけではなく、人間が使うという感性までコストをかけて開発したのだと言うことが思われた。これは素晴らしい!! さあ、Cobra の針を落とすときがやってきた!! 協奏曲第一番イ短調 第一楽章 Allegro moderato !!

グリュミオーの力強いアルコから始まり、動機的展開のソロとトゥッターが絡み合うように結びついていく。この時のヴァイオリンの質感の芳醇さと明晰さは何としたことか!! Avalon Isis のトゥッターがダイヤモンドでミッドレンジがセラミック!?? そんな印象はスピーカーの個性としても全く感じられないことは他の機会にも述べてきたが、この時ばかりは同じスピーカーとは思えないヴァイオリンの木肌のぬくもりが私の耳を通じて官能的な余韻感をみなぎらせてくる。グリュミオーをとり囲むソリスト・ロマンの各パートが各々の配置を後方に展開させ、楽団を俯瞰したときの状態を見事に聴き手にイメージさせる!!

ふと気がつくときグリュミオーのヴァイオリンがこれまでに聴いたときよりも濃厚な印象を受ける。いや、正確に言えば音像の中身がしっかりしていて楽音のエネルギーを周囲に撒き散らすことなく包括し、アナログだからということで曖昧な音像をふわふわと浮かせるということがないのだ。これはバックを務めるソリスト・ロマンのヴァイオリンやチェンバロなどにも共通して言える。くっきり楽音の“芯”が見えてくるが、その音の“核”の部分が過去の記憶と比較して素晴らしく鮮明になっている。スタジオ録音の打楽器やリズム楽器のように点として楽音の発祥ポイントをイメージできない弦楽器なので、その輪郭がくっきりと黒い線で描けるようなイラスト風のイメージではなからう。むしろ水彩絵の具を、水を多く含ませた筆によって引き伸ばしていくうちに、その色の濃い部分が自然に薄れていくように色彩感の濃淡で聴き取ってしまうのが弦楽器かもしれない。Caliburn で聴いたこのバッハは各奏者の存在感を大変くっきりと鮮明に再現する。しかし、その質感には今までにない楽音のコアと周辺に拡散していくエコー感のセパレーションに私は着目した。そう、静かだ!!

スクラッチノイズが大変少なく、またノイズの発生が極めて短時間であり尾を引かない。レコードがターンテーブルシートの上に浮いている状態では、音溝に含まれるノイズの原因となる傷などの要素をスタイラスチップが通過するときの反作用で大きな雑音として再生される。しかし、何と Caliburn ではレコード自体が完璧に 38Kg のプラッターと一体化しているので、針先と音溝の摩擦による反作用でレコード盤面が微妙に振動し、それをピックアップするということがないのだ。このノイズフロアの低さが私の記憶にあるグリュミオーのヴァイオリンの質感を変えてしまったようだ。とにかく前代未聞の静粛性が同じレコードの再生に表れるので、これには驚かされた!! そして、何と片面の演奏が終わるのが何と早いことか!! 聞き惚れているとあっという間に終わってしまった。さあ、次だ!!



あっという間に両面を聞き終わってしまった!! というよりも演奏から放してもらえない!! こんな体験は初めてだ!! 次は 1982 年に録音されたこれ、PAUL McCARTNEY 「TUG OF WAR」どうしても私の自前のコレクションは古いものばかりになってしまうが、ちょうどこの年に世界初の CD プレーヤーが発売されたことを思い出した。

A 面一曲目はタイトル曲の「TUG OF WAR」これは男たちが綱引きをする唸り声と息遣いからはじまり、やがてポールのヴォーカルがギターとともにセンターに登場する。この時に感じるヴォーカルのふくよかさが魅力とっていた。いや、近代的な音場型スピーカーで聴くときのエコー感の気持ちよさということと、ヴォーカルのエッジを強調しない空間への溶け込み方が魅力だと思っていた。しかし、Caliburn で聴くこのアルバムは正に驚きの連続となった。この最初のポールのヴォーカルは実はこんな端正な輪郭を保っているながら体温

を感じさせる暖かさがあったなんて始めてのこと。今までヴォーカルの口元から周辺に散らばっていくエコー感アナログの魅力であり持ち味なのだから、とっていたのが大きな間違いだったようだ。前に聴いたヴァイオリンでも同じような感触を言葉にしかけていたが、ここではっきりと見えてきた。そう!! 楽音の輪郭とは言いません、境目を強調するのではなく楽音の中身というか見えてくる姿そのものが大変鮮明でくっきりしている。つまり、楽音の内容物があつたとしたら、それが周囲から染み出していくような、濃厚な色が音像の周辺から蒸発していく陽炎のように、ふわーっと漂うようにもれ出てしまっていたのが、これまで私が聴いてきたアナログ再生のイメージだったようだ!!

ところがどうだろう!! Caliburn で聴くポールのヴォーカルは、その声量と旨味を一滴でももらしてはまずいとばかりに、その口許が定位する Avalon Isis のど真ん中の空気中にシルエットをびたりと貼り付け、今まで録音されていたのだらうと思っていたオーラのように周囲に発散していた成分をあっけなく消し去ってしまった。ただ、これは余韻感を失ったと言うことではなく、スタジオワークで処理されたリヴァーヴの響きは以前にも増して新鮮に鮮明に聴かせてくれているのに驚く。その証拠に、この曲では後半ではオーケストラやミリタリースネアの勇壮な打音が堂々と響き渡るが、それらが Avalon Isis の再現性の素晴らしさを借りて前例がない大きな響きの空間を提示する。これは凄い!!

一曲目のエンディングの響きが残っているうちに二曲目「TAKE IT AWAY」のスティーヴ・ガッドの激しいドラムとベースがいきなりスタートする。前曲のオーケストラの余韻感もアコースティックな編曲で刺激成分がなく、けっこう音量が上がっている時に急に激しいリズムが始まるので、私はこれまでずっと習慣としてボリュームを絞ることにしていた。ところがどうだろう!! 私がプリアンプのリモコンに指をかけようとして始まってしまったこの曲!!

「数え切れないほど聴いてきて騒々しいとしか思っていなかったイントロが!!」

なんとクリアーに、何と引き締まって、濁りを取り除いたリズム楽器のテンションと重量感が両立すると、こんなにも爽やかに、しかもこんなパワーでも苦もなく聴けることか!! しかも、ここがアナログの魅力なのだろうが、どこかに安心できる温度感というか質感の調和というか、和める要素が楽音にあるようで刺激は皆無。CD ではリモコンで簡単にトラックを選択して部分的な比較を何回も行なってきたが、この快感を耳が認めてしまうと途中で止められなくなってしまうのだ!! B面に返すのももどかしく、結局一枚を最後まで聴き続けてしまった!! 何と魅惑的な音だろうか!! ちなみに、バキュームを解除すると今度は後ろの方でオイルを循環させるためのポンプが「プルプル...」と動作するのがわかる。さあ次だ!!

スタジオ録音の妙を堪能した後はオーケストラだ。でも私のコレクションはやはり古いが、ご存知グスタフ・ホルストの「惑星」を続けて二枚聴いてみることにした。



左のジャケットは1971年録音のDEECAの名盤と言われていたもの。イギリスプレス of 輸入盤。ズービン・メータ指揮/ロスアンゼルス交響楽団。右側が1978年録音の国内盤でゲオルグ・ショルティエー指揮/ロンドン交響楽団。今でこそ、ジュピターがヒットして私の子供たちも知るようになったが、私が入社当時から所有しているもの。当時は二人の指揮者も若かったのか、あるいはバーンスタインを意識してか演奏時間は短めで力強くテンポも早めで切れ味のいい演奏かと思われる。

最初に新しい録音? のショルティエー指揮/ロンドン交響楽団のレコードを Caliburn にセットして、ちょっと意地悪を試してみた。バキュームオンで瞬間的に吸着したのを確認してから、プッター周囲のラバーエッジとレコードの端を無理やり引き剥がすようにして密着しているのをわずかの隙間を空けてはがしてみた。いったん隙間を空けてから指を離すと直ちにコントロールユニットが反応して「シュ!!」と極めて短時間の吸引を行い再び密着する。お～と面白くなって場所を変えて数回やってみた。確かにコントロールユニットに内蔵されたコンピューターは私のいたずらに気が付いたようで、いったいこの状態であればポンプを何秒動かせばいいのかを承知しており、バキュームが完了するとポンプの動作音も瞬間的に止まる。なかなか賢いやつだと思いながら、要は任せておけば安心なのだ勝手に納得していた。

「木星・ジュピター」は私も一番好きな楽章だが、ショルティエー/ロンドンでは冒頭の「火星」から針を落とすことにした。というのは、CDでもそうなのだが、5/4拍子のリズム・オスティートが特徴で5拍子にはチャイコフスキーの「悲愴」第二楽章の変形ワルツのように2+3で構成されるものもあるが、ここでは3+2で変形マーチのような奏法。それが打楽器と華々しい管楽器の乱舞が冒頭より始まり、オーディオシステムで再生するとなると音量設定に勇気がいるところだ。このあたりはバーンスタインの録音よりも10秒ほど長い演奏時間だとあるが、いずれにしても後半での盛り上がりと一種の不協和音を敢えて引用するというホルストのスコアから、デジタル録音になってからでも最初は当たり前前に設定したボリュームでは曲の進行に伴って微妙に音量を下げたくなるのが一般的かもしれず、これに挑戦した!!

コントラバスの低音部に背後の打楽器が折り重なり、トランペットとトロンボーンによるカノン風のリズムが繰り返され、最初は抑えていたものが次第に長いクレッシェンドを描く。すると、どうだろうか!! Caliburnは自信たっぷりに「何を心配しているんだ?」と言わんばかりにCobraは悠然とブラックディスクの上で光沢感豊かなボディーを滑らせていく。

「おお!!なんと整然として聴きやすく、こんなにも情報量が28年前の録音にあったのか!!」

と、いつボリュームを絞ろうか、という考えなどすっかり忘れさせてくれる安定感が私の耳に心地よく戦争の神マルスの激しさをもたらしてくれた。こんなことは初めてだ!! 特に大編成のバスーンやホルンの低音階などが大変克明に描写され、そして打楽器のリズムがAvalon Isisの周囲を取り囲むように堂々と鳴り響く。しかし、それらの音の洪水に見舞われても、その奔流に弦楽器の旋律と木管楽器が決して埋もれることがない!! これはもしかしたらCDよりもいいのでは!? と安直な思いが浮かぶが、その発想の頭を押し下げて聴き続けた。さて、既にこの段階で比較したいという好奇心から、更に録音の古いメータ/ロスアンゼルス交響楽団のレコードを忙しくセットする。時のズービン・メータは35歳の若さながらロスアンゼルス交響楽団の音楽監督に就任して4年目という威勢の良い時期だ。ちょうどベトナム戦争が泥沼化する時代であり、反戦やヒッピーが流行する時代のさきがけであり、そして日本の家庭でもセパレートステレオという形式で再生装置が普及し始めた頃だ。当然、30年以上前のステレオセットという次元なので現在から音質を想像すればレトロと言えなくもない。

そんな時代背景があり当時の再生装置で楽しむための録音ということでアナログレコードの歴史を垣間見る思いの一枚である。さあ、そんなメータ/ロスアンゼルの「火星」に Cobra が降りていった!! すると...、録音年代が古いのか盤質がよくないのかテープヒスとスクラッチノイズの量が多いというのが導入部の最初から耳につく。そして...!?

「おー、そういうことか~!! しかし、はっきりくっきり聴こえるな~、これは初めてだ!!」

アメリカのオーケストラの個性かお国柄か、雄大な低音部のバランスがまず違うという印象があり、続いて管楽器の描き方が多少ドライであるが勇ましい鳴りっぷり。それがしばらく続くうちに考えてみると、当時の再生装置で聴く分には、このバランスの方が良かったのかもしれない。と逆説的な解釈が頭をよぎる。弦楽器よりも低音部と打楽器、そしてきらめいて欲しい管楽器が主役は自分だという存在感で描かれている。まてよ、今までこの二枚を比べた時に、こんな確固たる違いを私は感じていただろうか?メータ/ロスアンゼルの「火星」は弦楽器を除くほかの楽音に優雅さよりも迫力を感じる録音センス。良い意味で「ドンシャリ」の雰囲気として明確に感じられた。よし!! では今度は「木星」を聴いてみよう。と Cobra の首をそっと持ち上げて内周へとスタイラスを運んでいく。

「やっぱりそうか~、なるほどね~」

という確信が Caliburn での再生音ではっきりとわかってきた。私が思うに、その時代の再生装置、そして録音スタジオのモニタースピーカーとアンプの実力ということを考えて、メータ/ロスアンゼルの1971年という時代のプレイバックシステムとショルティー/ロンドンの1978年という時間差では結構大きな違いがあったはずだ。つまり古い時代のメータ/ロスアンゼルの録音は再生側が未熟であっただけに、低域方向の豊かさを意識し、管楽器がくすんでしまわないようにメリハリをつけた録音傾向があるということだろう。二枚の「木星・ジュピター」をも聴き比べて時代の変化を聞き取ることが出来た。Caliburnのおかげだ!! それにしてもLPレコードに記録されているオーケストラの多彩な楽音と情報量には驚いた。なぜかといえば、定位感と色彩感の安定度が今までの次元を異なるように違うからだ。言い換えれば、CDのように克明な定位感を持ちながら、楽音の中身に感じる質感には暖かさや滑らかさがある。こんな調子の良いことが平然と行なわれる Caliburn に私は感嘆のまなざしを向けざるを得なかった。さあ、オーケストラの素晴らしさはわかった。次は...!?



いや~若いな~、と思わず笑ってしまうのが、このジャケットのジョージ・ベンソンである。彼は1964年にデビューして、何とこのアルバムが38枚目という当時売れっ子のスターだった。これは84年のアルバムで「20/20」というタイトル。当時流行したドラムマシンの強烈なビートがきいた曲もいいのだが、私はどうしてもA面のラスト「BEYOND THE SAE(La Mar)」が好きでたまらない。シャルル・トネが作った古いシャンソンをフォービートのジャズヴォーカルとしてアレンジしたもの。そして、この曲は同アルバムの他の収録曲とは違いアコースティックなビッグバンドがバックを務めている。

そのメンバーがまた凄い。ソロギターはジョージ・ベンソン本人でピアノはジョー・サンプル、そしてカウントベースでリズムギターを担当するフレディー・グリーン、アルトサクソにフランク・ウェス、チャールズ・I・ウィリアムズ、テナーサクソにジミー・ヒース、ジョージ・コールマン、バリトンサクソにボビー・エルドリッジ、トランペットにジョー・ファディス、フェリックス・ベガ、アール・ガードナー、ジョー・ニューマン、更に後にデビッド・マッシュューズやスティーヴ・ガッドらと新世代MJQを結成するルー・ソロフなどが。

トロンボーンにはスライド・ハンプトン、ベニー・パウエル、ロビン・ユーバンクス、デューブ・テイラー、ドラムがジョン・ロビンソン、ベースがアール・メイなどなど錚々たる顔ぶれのジャズメンたちがバックを務めている。最内周に刻まれたこの一曲は音質的には不利なはずだが…。さあ、ちょっと緊張しながら Cobra の針先を一番奥に送り込むことにした…。

「えっ!! なに!?! このピアノ、このベース、このヴォーカルは!!」

Avalon Isis のセンターから右チャンネルを使って冒頭にジョー・サンプルのピアノが響く。彼のピアノの音はどのディスクでもすっとした細身の打音として聴けるが、この時のピアノの音は今までに体験がないほどクリスタルな印象だった。つまり、高速で立ち上がり音像は見事に引き締まり、そして透明感が素晴らしいということ。そして、センターに現れたベースは本当にこれがアナログの音なのかと疑いたくなるような解像度と輪郭の鮮明さ、音像の小型化という以前の記憶をすべて覆す音なのだ!!そして、ヴォーカルが…、何とジョージ・ベンソンの口許はこんなにチャーミングだったかと驚くほどのジャストフォーカス。アナログプレーヤーのテストでは必ずかける聴き慣れた曲のはずが、新しい発見に驚いたしまった。豪華なホーンセクションがくっきりとリズムを刻むフレディー・グリーンを取り囲むように展開し、シンコペーションをきかせたテンションの高い演奏がジョージ・ベンソンのヴォーカルを盛り上げる。ヴォーカルの音階が低くなり、ジョージ・ベンソンが口を閉じてうなるように歌う「ne」の発音では低域方向に向かう倍音が Avalon Isis のウーファーを刺激するのか、空気中を伝わって私の体を揺さぶるバイブレーションがやってくる。これは凄い!! 最も不利な内周であるが全く不安要素はない。逆に演奏の楽しさが溢れるばかりだ!!

「ほんと!!楽しい!! なんでアナログを聴くとこんなに楽しいのか!?!」

そんな愚問を頭に描くうちにリズムに合わせて体を動かしている自分がいた。これも私にしては珍しく? 検証するというよりも楽しんでる!!さて、次だ!!

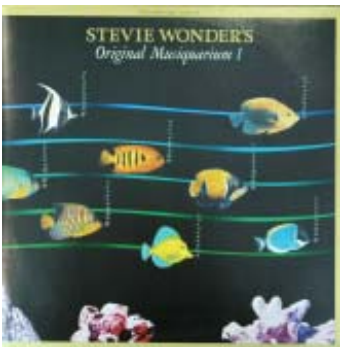


このジャケットを見て懐かしいと思われる方も多いと思う。今でこそ大御所の貫禄を備えるクインシー・ジョーンズの A&M での三枚目のアルバム「SMACKWATER JACK」1978 年の作品。この頃から既に彼のアルバムでの豪華な参加ミュージシャンには現在のスターが多数共演している。ピアノ・キーボード関係ではボブ・ジェームス、ボビー・スコット、ジョー・サンプル、ジェイキー・ピアード、ジミー・スミス、後年リファレンス・レコーディングスで作品を出しているディック・ハイマン、そして何と私の大好きなモンティ・アレクサンダーなどなど。更にベースはレイ・ブラウン、ギターではトゥース・シールマンズ、エリック・ゲイル、ジム・ホール、ジョー・ベックなどなど。参加ミュージシャンをリストアップしていくとまだまだ続いてしまいきりがないほど。それほどの人脈とアレンジャー、プロデューサーとして当時から脚光を浴びていた存在だ。さて、私はこのアルバムから二曲を聴くことにした。A 面「IRONSIDE」「WHAT'S GOING ON?」である。

私が子供の頃にアメリカのテレビドラマで「アイアンサイド」という番組があった。非情な銃弾で半身不随になってしまった刑事が車椅子に乗って活躍するというものだったが、そのテーマ曲がこれ。冒頭ではキーボードによるパトカーのサイレンの音が勇ましく聞こえてくると馴染みのあるメロディーが始まる。そこで登場するドラムとベースの音像が過去に経験のないくらいに小型化していることに先ずショックを受ける。A&M の録音はどこか混沌としたリズム楽器が当たり前なんだと思っていた私は、今まで 20 年以上何を聴いてきたのかと、

これまでのアナログレコードの音質に対して大きな衝撃を感じてしまった!! ジェイミー・リチャードソンのソプラノサクソ、ヒューバート・ローズのフルート、フレディー・ハバードのフリーゲルホーンと次々に登場するブラスセクションの各パートにおいても、これほどくっきりとした音像を聴いたことがない。レコードの音とはこういうものだったのか!!

「WHAT'S GOING ON?」のイントロではやはり低音リズム楽器の引き締まりが物凄い。38Kgのプッターに完全にレコードが一体化するというのは正に未知の体験だが、これまで聴いてきた常識が音を立てて崩れていく。アナログなのにCDなみに定位感と音像の輪郭表現がなぜこれほどに素晴らしいのか!! 上記に登場するブラスセクションが同様に未体験の鮮明さで交互に登場するとトゥース・シールマンズのハーモニカやミルト・ジャクソンのバイヴがソロパートを奏で、ハリー・ルーコフスキーのジャズヴァイオリンが激しく切り込んでくる。エキサイティングな演奏であれば多少の荒れをダイナミックさの代名詞として思っていた私は、実際に記録されている 45/45 方式アナログ信号がこれほどまでに純粋な質感を持っていたのかと愕然としてしまった。プッターの威力だけではなく、モーターやアームまですべて過去の考え方を捨てて新開発したということが、再生音に関しても新しい質感を私の耳に“新開発”してくれたのである。LPレコードの常識とは一体なんだったのか!?! さあ、次だ!!



時は1950年、アメリカ・ミシガン州デトロイトから90マイルほどの町、サギノウ市で彼は生まれた。本名スティーヴランド・モリス・ジャドキンス。三年後には父が蒸発し一家は母ルーラの実家があるデトロイトに移住し、そのときにおもちゃのハーモニカを与えられる。4歳の時に教会の聖歌隊に入り本物のハーモニカを手に入れた。ジョニー・オーティスらの歌をラジオで熱心に聞いていたという。そんなある日、隣人が転居する時に置いていってくれたピアノを始めて叩き始めた。8歳の頃にはボンゴ、ドラム、ピアノなど演奏できるようになっていた。学校の友人ジョン・グローヴァーを通じて、彼の従兄でミラクルズのメンバー、ロニー・ホワイトと知り合う。ロニーは彼をタムラのソングライターでありプロデューサーのブライアン・ホランドに紹介、更にホランドはタムラの社長ベリー・ゴードィ・ジュニアに引き合わせた。彼はゴードィの前で45分間に渡りハーモニカ、ドラム、ヴォーカルを披露。これが認められて傘下レーベルのヒッツヴィルと契約。わずか週給2ドル50セントでタムラ=モータウンのスタジオに入り多くのミュージシャンの演奏に触れる。そして、若干11歳で「マザー・サンキュー」を初録音。1962年にデビューシングル「アイ・コール・イット・プリティー・ミュージック」をリリース。翌年モータウン・レビューの一員として中西部をツアー。このレビューで熱狂的な支持を得た「フィンガーティップス」をライブレコーディングし第四シングルとして発売。それが連続三週間ビルボード誌 HOT100 のトップを飾りミリオンセラーとなり一躍スターダムにのし上がる。その翌年14歳のとき、ステージネーム「リトル・スティービー・ワンダー」からリトルをとり変声期へ。1965年に変声期が終わり本格的な活動に入る。

そんなスティービー・ワンダーのエピソードはまだまだ続くが、1972年にジェフ・ベックに提供した曲「迷信」を自身のアルバム「トーキング・ブック」にも収録。そこからシングルカットされて5ヶ月にも渡るロングヒットとなる。私がこの曲を初めて聴いたのは15歳の頃にラジオからだった。もちろん、現在に至るまで往年の大ヒットを時々のシステムを聴いてきたが、Caliburnではどうなんだろうか!?! こんな好奇心を抑えられるはずがない。

「えー!!モータウンってこんなにいい音してたんだ!!」

今や懐かしさを通り越して最初の一曲で大感動!!独特のリズムを繰り返すギターのうなりが何と鮮明なことか!!そして、ドラム、ベースという低音リズム楽器がこれほどセンターに凝縮した演奏は聴いたことがない!!当然それらのテンションは引き締まっており、背後のホーンセクションの透明感は何ということだろうか!!青春時代の思い出だが、これまでの経験ではモータウンの音というのはやっぱり独特であり、どっぴりとした低音だと思っていたのが何と恐ろしいほどに研ぎ澄まされた再生音となって蘇る!!この二枚組みのLPの最初の一曲でノックダウンされた私がこの一曲で終わるはずもなく、またまた聴き続けてしまった!!

数々のグラミー賞を総なめにしてミリオンセラーとプラチナディスクを繰り返しながら、スティービー・ワンダーは愛娘のアイシャ・ザキアを授かりヨランダ・シモンズと結婚したのが1975年、その年に史上空前の3000万ドルでモータウンと契約更新。翌年のアルバム「キー・オブ・ライフ」に収められているのが「可愛いアイシャ(Isn't she lovely)」で、これが二枚組み第四面の最後から二曲目に入っている。私は思わず目頭が熱くなってしまった。

聴き馴染んだイントロはこれまでのどの再生音よりも美しく、そして「Isn't she lovely Isn't she wonderful Isn't she precious」と続くスティービーのヴォーカルを聴いていると目の前の光景が潤んできてにじんでしまう感激が胸を打つ。なんで!?!スティービーが我が娘に対する愛情が、その声を感じられると言ったらオーバーだろうか!?!エンディングの赤ちゃんの声と本人の語りかける声が信じられないくらいに身近に感じられリピートされる主題のメロディーがずっと私の耳に残っている。この仕事を早く片付けなければ、という気持ちと裏腹に音楽を楽しむということをLPレコードから教えられる私は今まで何をやっていたのか。

そして、最後がこのアルバムが発売された1982年に大ヒットした「That Girl」に続く「Do I Do」だった。これは録音のクオリティーが一段と進歩したのか、パーカッションの切れ味にも磨きがかかり、ベースラインが面白いようにころころと転がりべたつかない。キックドラムの音は見事に乾いた質感をAvalon Isisに伝え、モータウンの低音というイメージは完全に覆っていた。こんなに鮮明な低音だったんだ!!と我知らず快哉を叫ぶ自分がいた。

そして、二枚組みを聴き終えた私がふと感じたことはモータウンというレーベルのマーケティングの上手さだった。モータウンの楽曲を好んで聴く人々というのは、いったいどんなオーディオシステムで聴くのだろうか!?!ここに答えがある。60年代からアメリカの社会で黒人たちがどのような境遇であったか。

その暮らしぶりや音楽に接する道具としてどんな装置を使っていたのか?今ここで私が使っているような数十万ドルもするような機械など彼らには縁がなかったに違いない。スティービーのデビュー当時から思えば真空管のラジオから始まり、それはやがてトランジスターラジオになり、そしてラジカセ、カーステレオなど大衆商品として位置付けられる装置で聴くのがせいぜいだったろう。私が先ほどまで聴いてきたスティービーのアルバムの周波数特性から考えたバランスでは、スティービーのヴォーカルはレベルが小さめのバランスで録音されている。そして、意外だったモータウンというレーベルの美しい高域と引き締まった低域が確かに確認されたが、それらはヴォーカルのレベルと同等以上のエネルギー感で録音されている。つまり、このバランスでヴォーカル以外のものが大きすぎると感じるのは再生システムがプアーであった場合にはジャストなバランスとなって聴けるといふものなのだ。

ラジオ、ラジカセで聴くとヴォーカルがちょうど浮かび上がり、ハイファイ過ぎるシステムでは派手に聴こえる低音と高音がちょっと抑えられるからだ。しかし、派手に聴こえるといっても品質が悪いということではない。だから、モータウンの音という先入観に対して私は

驚いたのだ。正に大衆文化として数々の偉業を成し遂げたスティービーは、その愛情の発露として自分の音楽を支持する人々の道具立てに対して最大のサービス精神を発揮した録音になっているということがわかる。これをマーケティングと称するかサービス精神と考えるか、純粹に感動している今の私には二の次のことだった。



この一枚は私が入社当時から会社と自宅の JBL で数え切れないくらい聴いてきたもの。1974 年発売の「Blue city」tbm(P)-2524 鈴木勲の二枚目のアルバムだ。ピアノ:菅野邦彦、ギター:渡辺香津美、ベース:井野信義、ドラム:小原哲次郎という当時の若手を起用しているが、本当に 70 年代の日本のジャズは熱かったという思い出がある。この前年に日本ジャズ・ディスク大賞を受賞した「BLOW UP」も有名だが、私はこのアルバム B 面に収録されている「Play fiddle play」が大のお気に入り。鈴木勲がベースのボーイングにオクターブのスキップを乗せるという技法は当時でも、いや現在

でも大変個性的であり、多数のオーディオシステムで聴くと大変そのシステムの特徴が表れるものだ。しかし、ご本人、鈴木勲が現在でも現役で活躍中というのとはとてもうれしいものであり、このジャケット写真からのリンクをご覧頂きたい。自分が知り尽くしたつもりでいたもの、自分の頭の中で常識と化していたものを Caliburn がどう変えてくれるのか？

まずは A 面の「Body and soul」から聴き始めた。すると...

「これってチェロだよ、確かに...」

ジャズで使うベースにはピッコロベースという小ぶりの楽器があり、時々録音にも使われていたものだが、ここでは鈴木勲は A 面の二曲ではチェロを弾いていた。しかも、上記の本人のサイトに書かれていたのを見て初めて知ったのだが、特注の珍しいダブル弦のチェロを当時は弾いていたという。普通は 4 本弦なのだが、それが 8 本弦であったとは!! 「Body and soul」の出だしでも鈴木勲のソロがいきなり入ってくるが、この時までそんなことを再生音から感じ取ることは出来なかった。ピッチカートの余韻に「ウィーン～」という独特の響きが付いて回るパートがあるのだが、これがそうだったのか!!

ゆったりとしたリズムで展開するこの曲で聴き取れるチェロの音像のなんともチャーミングなことか。言い換えればフォーカスがびしっと決まり、余分な共振がプレーヤーにないところまで LP の音というのは音像を引き絞ることが出来るのか、と特に低音楽器の質感に今までにない再現性を見て驚いてしまった。途中からアップテンポされて菅野邦彦がリードするとドラムが連動し、ハイハットの連打が透き通るように右側の Isis からこぼれてくる。これは堪らない!!

1970 年当時ニューヨークの多くのジャズメンは月に当時の金で 100 ドル以上もするクィーンズやブルックリンに住んでいることが多かったと言う。そんな時、鈴木勲はマンハッタンの 45 丁目に住んでいた。正確に言うとポルノ映画館が三軒並んでいるエイス・アベニューの 45 丁目で、いわゆるダウントウン、ハーレムと言われる一帯。このガードマン付の高級アパートに日本人妻とタカシ君という坊やと住んでいたのが、あのアート・ブレイキーである。何と鈴木勲はそのアート・ブレイキーの自宅に居候していたという。

それを思い出して作曲したのか、二曲目は「45th street-at 8th avenue」最初からノリのいいリズムで始まり 11 分という長い曲の中には各メンバーのソロパートが十分に配置されている。この冒頭でも鈴木勲のチェロが弾けるように展開するが、チェロをジャズとして弾き

こなし、しかもダブル弦という珍しい音色が今までになく鮮明に私の目の前で踊り出す!!
左手でかけるピブラートがこんなにくっきりと感じ取れ、チェロをベースのようにエネルギーにピッチカートすると何とハイスピードでハイテンションの音がすることだろうか!!
今まではLPレコードの低音とはデジタルのようにあっさりしたものではなく、独特の腰の強さというか、音像の大きさなどかまうものかと言う勢いを肯定的に聴いてきたが、実際にはこんな鮮明なディテールで録音されていたなどとは誰も考えられなかっただろう。いや、正確に言えば世界に十人程度いるというCaliburnのオーナー以外のすべての人類はこんなアナログレコードの世界を知ることには出来ないのだった。

「え~!! これじゃあ今まで聴いてきたレコードの音って何だったんだ!!」

LPレコードの旨味、アナログの魅力とは過度に演出されたプレーヤーの個性だったのか!!
いかん、と思いながらも一枚のレコードに記録されているはずの質感の正体に、あまりにも大きなギャップを感じながらB面を早く聴きたいと血が騒ぐようだ。「Play fiddle play」だ!!

「まずい!!! これほどのものか!!」

なんと「Play fiddle play」は三回聴いてしまった!! 演奏の始まりから驚きと発見の連続。
この曲で鈴木勲が奏でるベースは強烈なアルコ、いやライナーノーツではボーイングと書かれているのでジャズではそう言うのだろうか? バリバリとベースの弦のバイブレーションが空気中を伝わって私の下腹部に直接振動を伝えてくるようなリアルさ。そして、あたかもセンターにもう一台のAvalon Isisがセットしてあって、そこからベースと鈴木勲のハミングが聴こえてくるのではと錯覚するほどの音像の鮮明さと引き絞られたシルエットのコンパクトさ。今までは、荒々しいと思えるほど男くさいベースのざらついた感じと左右スピーカーの間に大胆で雄大なベースの音像が現れることを肯定してきたものだった。こういう録音なのだろうと、楽しめればいいのか、という楽観主義的な見方でジャズのウッドベースとはこういう録音がダイナミックでいいのだろう、と思っていたものだった。

ところが、Caliburnで聴いた瞬間に過去の私の記憶は一瞬にして更新しなければいけない誤った解釈であったことに気が付かされた。なぜアナログ再生なのにこれほど音像の質感がくっきりと最小面積で表現されるのか!! しかも、低音弦楽器という雰囲気重視で雄大な音像になっても違和感を持たなかったものが豹変してしまった。そして、小原哲次郎のタムやスネアは控えめな録音だが、シンバルワークの繊細感は何例のないほどに冴え渡り、叩かれたシンバルが煽られるたびに光の反射できらめくようだ。シンコペーションのきいた渡辺香津美のギターはきっちりとカッティングの瞬間を捉え、ソロパートに入るといきなり存在感を倍にしてセンター左よりに出現する。その鮮明なタッチは激しく立ち上がるが刺激臭はない。

アナログ再生において楽音の輪郭、音像の外形、これらを司るのはプレーヤーの完成度に関係するものと考えているが、私ははたとこの存在感に注目した。[Lyra Titan](#)だ!!

このような高域の情報量の素晴らしさと質感の鮮明な再現性はカートリッジの貢献度がどれほど大きなものを納得させられた。Continuumがリファレンスとしているということは聞いていたが、楽音の質感に天井知らずに伸びていく高域に鮮やかさを与え、その濁りのないトレーシングをCaliburnが支えているということだろうか。古くてシンプルな録音の中にこれほどの情報量とくっきりとした輪郭表現が隠されていたということで、見えない平手で頬を叩かれたような衝撃が走り私はわが耳を疑った。さて、同じ曲をなぜ三回も聴いたのか!?

実は二回目は自宅にある同じアルバムのCDからCD-Rにコピーしたデジタル再生で聴いていたものだった。この比較の衝撃は大きかった!! 私は以前からデジタルかアナログか、という議論にはとらわれたくないという考え方で、記録方式に優劣があるのではなく再生システムの完成度によって変化してくる両者であり結論はどちらでもないと言ってきた。従って、Caliburnの試聴と評価に関してもデジタルとの比較はせずにおこうと思ったのだが、私の探究心はこの禁断の果実に手を伸ばすという誘惑に負けてしまったようだ。なぜなら、私が信奉する世界最高峰のデジタル再生システムがここにあるからだ。この先が怖い!!

生まれて初めての体験というもので正に初めて味わったものは未知との遭遇であり、それもひとしおの感動があるだろうが、今までに聴いた回数が多ければ多いほど、その変化の大きさに感動するレベルは更に大きいものとなる。例えば、生まれて初めての食べ物を口にした時の感動は新鮮な驚きに裏打ちされたものだと思うのだが、日々口にしているもの... ご飯にしても水にしても、慣れ親しんだもののはずが全く違う美味を感じたときのショック。

そして同じもののはずなのに、これまで何を味わったつもりでいたのかという驚き。今の私の心境は正に後者の感動に他ならない。そして、それが青春時代の思い出という、ほんのり甘酸っぱい切ない記憶に織り込まれた音楽のロマンスだとしたら、この年になって青春時代に見た覚えのある当時のテレビ画面のイメージがいきなり100インチのハイビジョンとなって目の前に現れたら...。今回の試聴で思わず目頭が熱くなり、目が潤んで風景がかすんでしまったという私なりの胸にずしりと来る感動をしたのが次の選曲だった。これはwebでのリンクがあるので、詳細はそちらで。さあ、今回もCobraに指を添えて針を落とす...



このアルバムの制作には三年くらいかかったようだが発売は1976年。当時この業界の先輩たちがスピーカーの調整に使っていたのを思い出した。そして、私はこのディスクはCDを買うことはなく、ずっとレコードで聴き続けてきた。従って、他のレコードよりも大変多くのシステムで聴き続けてきたものであり、まさに私にとっては水のようなもの。それほど慣れ親しんだ一枚だ。その一曲目「あの日にかえりたい」が始まった時に本当に私の背筋から電気ショックが頭まで走った。なんだ、このドラムの鮮明さは!?イントロのバックコーラスはこんなにきれいだったの!?そのコーラスに隠れるようにしてフルートのユニゾンが入っていたなんて!!

そして私が持っている当時のレコードのレーベルには荒井由実となっている彼女の声が出礼ながらこんなにも繊細で美しかったか!!私は今まで何を聴いていたのか?私がこの曲で記憶しているすべてのパートがことごとく鮮度を変え、またエコー感だと思っていた響きの尾ひれがなくなってみると本当の声質が見えてくる。あらゆる楽音の記憶がすべて更新されていくのを涙ながらに聴いてしまうと、この一曲で終わるはずがない。結局最後の一曲まで聴き続けてしまい、各々の曲のどのパートが、という各論での評価をするだけの記憶力も気力もなくなってしまい、ただただ熱い感動が胸にこみ上げてくるだけ!!

ただひとつ、荒井由実のヴォーカルは一曲ごとにすべて違う質感で録音されているということが初めてわかった驚きは大きい。「あの日にかえりたい」での彼女の声が一番輪郭をコンパクトにして奥行き方向にエコー感を広げフォーカスをチェックするにはちょうどよい。続く各曲ではふっくらさせた口許あり、リヴァーヴをほとんどかけずにすっぴんの声もあり、はたまた目の前でゆったり広がる展開ありと、スタジオワークによるヴォーカルの演出がかくも細やかにされていたなど今の今まで知らなかった。いや、知ることが出来なかった!!



どういうわけか 1978 年の録音が多いようだが、これは前作とは違って楽器の使い方、録音の仕方がアコースティックなものが多く、ポップなイメージから方向性を変えたようなところが私のお気に入り。パーカッションは大変鮮明なのに他のパートはちょっとゆったりしていて、ストリングスを多用しているのも良い印象。そして、同様に荒井由実、いや、この当時に松任谷由実とレーベルに印刷されている彼女の声質も各曲で大きな違いがある。そして、20 代の女性がロマンスをどのように捕らえているのか、ドラマチックな歌詞なのにさらっと聞かせるところが当時の彼女の年代として実感あるものだ。そして、男性にも共感できるものが浮かび上がってきて、ちょっぴりほろ苦い思いが更に胸にしみこんでいくようだ。これも最後まで聴いてしまった。本当はこれでは仕事にならないのだが...



私はこれも CD に買い替えするつもりもなく LP で聴き続けている。もちろん、当時は毎回彼女の新作は購入していたので自宅にはみな LP で揃っているが、私の記憶が確かだとしたら、1984 年のこの作品の頃から松任谷由実の音作りが大きく変わってきた。マスタリングはかの有名なバーニー・グランドマン、ミキシングはなんとマット・フォージャーが、メタル原盤の処理はオーディオフィアンならご存知のシェフィールドラボに、そして Bruce Swedien という大御所も関わっていると、とにかくこの頃からレコーディングに関するクレジットの情報量が格段に多くなり、またレコードの音質・品質も大変素晴らしくなった。

大体私が自分の試聴時間をゆっくり取れるのは深夜、今回の試聴も半ば時間との戦いのようなものだが、どうも聴きすぎていけない。このアルバムでもスタジオワークの近代化がこれほど素晴らしくなっていたとは想像もしていなかった。とにかく音像がピンポイントの正確さというかジャストに定位し、そのシルエットはすべての曲で極小のサイズ。そして、その口許が放つエコー感の広がりは何と素晴らしいことか。逆にリズム楽器とパーカッション、シンセサイザーの打ち込みによる点音源として聴ける音のコスメティックが素晴らしい!!

マスタリングとレコーディングの品位が以前より格段に進化しているということが、ここまで克明に提示されると CD との格差は逆転現象をもたらし始める。つまり、録音品位の進化がデジタル時代に入ってくると、その情報量の保存の仕方でアナログディスクの本当の優位性が見えてきたようなのだ。しかし、その前提は Caliburn の存在だということだが...!!

さて、ここでなぜ行間を空けたのか? 実は Caliburn によって全く異なるアナログディスクの魅力に翻弄され、以上は LP レコードだけを試聴して済ませようと思っていた。しかし、あまりの格差に愕然となってしまった私は急遽現在発売されている同じ CD を取り寄せて徹底的に比較しようという気持ちになってしまったのだ。アナログとデジタルで三種類のアルバム計 6 枚、全 60 曲をアナログとデジタルの両方で一曲ずつ比較試聴するという手間ひまのかかる検証を始めてしまったのだから、我ながら呆れてしまった。これでは時間がかかるはずだ。

上記のリンクで紹介されている現在の松任谷由実の CD はリマスタリングされているという。しかも、現在の技術力と感性でリマスタリングしているのが上記のバーニー・グランドマンであるというのだから興味深い。全曲比較しての 30 曲の違いをすべて述べるのは荷が重いので象徴的な私の印象をお伝えすることにする。まず、現在の CD ではアナログとデジタルの正確な比較は出来なかった。それはリマスタリングの結果がマーケティングを意識した音作り

になっていることがあからさまにわかってしまったからだ。30年以上前のものも含めて現在のリスナーにセールスしようというのだから一概に否定することは出来ないが、チープな再生装置で聴く分にはヴォーカルのリヴァーブを深くしてエコー感を増量し、かつ高域のバランスを微妙に大きくしていることで鮮明さが演出できるかもしれない。その証拠にテープヒスも大きくなっていたり特定の高音楽器の輝きがきつくなっていたり、ヴォーカルの発音でカ行やサ行の質感にデフォルメされたものを感じる。特に年代の古い順にリマスタリングによる変化量が大きいので、ここでのハイレベルな再生装置では皆裏目に出ているということが私には残念に思えた。ただし、一般的な小型ステレオ、携帯再生機や車などではウケのいい音質になっていることは間違いない。私はこの点を割引ながら各曲を聴くことにした。

また、デジタル対アナログという表現はこれ以降では極力使用しないことにしたい。記録方式の優劣には結論が出せない。それは再生装置の完成度によって決まるものという持論を継承するためであり、この環境とシステムで感じたことが一般論としては通用しないということをも前提としているからだ。従って、今後はデジタル代表の ESOTERIC 対 Caliburn という固有のものとしてご理解頂きたい。

合計6枚で60曲をすべて同一条件で比較試聴して各曲に共通する印象として感じたことを述べていくと、まず低域楽器の重量感と固体感に逆転現象が起こっていたことがあげられる。一般的なアナログプレーヤーの特にトーンアームの性格として低域共振が必ず存在するので、再生周波数が低くなればなるほど正確な質感での再生が難しいということ。これは低音楽器の量感としては表現できても楽音の輪郭をいかに正確に描くかということに関してはデジタル再生の方に分があるということだ。言い換えれば、LPレコードの再生ではどうしてもデジタルに比べて低音楽器の音像が大きくなってしまい、また量感ということでも正確さを欠いてしまいオーバー気味の表現になってしまうことが多分にあった。むしろ、それがダイナミックでよろしいと考えていたのではないだろうか。

ところが、最初に Caliburn で聴くと、本当にこれがアナログディスクの低音なのだろうか、という驚きは何よりも大きく私を驚かせた。そういうものだろうと思っていた低域の再現性が曲によっては CD よりも小ぶりで引き締まった低域を叩き出し、しかも30曲すべてにおいて Caliburn の再生する低音の雄大さ量感、重々しさがデジタルよりも素晴らしいと言う印象があり、コントロールされている低音、筋肉質の低音楽器を、音楽そのものを楽しむ土台として提供してくれるのである。Caliburn で聴く低音は色彩感が濃く、音像の表面積が小さく、決して強調感のないバランスで楽音に地に付いた安定感をもたらしている。Caliburn の低音を否定できる人はいないだろう。これも、前章までに述べてきた新開力と物量投入の賜物だ。

次に注目したいのが高域に関すること。低域とは逆にデジタル再生はサンプリング周波数の半分までという再生帯域の制約があり、ここでのリファレンスである ESOTERIC P-01&D-01 のシステムでは通常の CD でも SACD でも 44KHz という再生帯域を前提としている。もちろん、それで十分すぎるほどの能力と魅力があることは間違いない。しかし、Caliburn と [Lyra Titan](#) がすべての演奏で聴かせてくれる高音楽器の質感は私の以前の記憶にはなかった!!

アナログ再生というのはヘッドシェルの共振による個性、トーンアームのダンピング量の加減、ターンテーブルシートの材質、スタビライザーの品質、トーンアームの内部配線の品質、などなど私の経験から高域の再生音に影響を及ぼす項目を数え上げていったらきりがないくらいなのだ。従って、私も優秀なカートリッジを使用していることを前提に、プレーヤーのどこかに特異なキャラクターをもたらす共振モードがあれば、それを看過するだけの自信はある。その私が、これほど透明度の高い高域に接した記憶がないのだから困ってしまう。

上記三枚のアルバムで最後に試聴した NO SIDE のラストの曲「～ノーサイド・夏～ 空耳のホイッスル」で右チャンネルから一定間隔で聞こえて来るハンドベルの質感をチェックしたら Caliburn の物凄さがご理解頂けるだろう。いかにリマスタリングによって味付けを変えて高音の響きを意識的に美化しようと思っても、この違いの大きさには反論の余地がない。

インスタントのダシか本物の魚介からとったダシか、口に入れればわかってしまう違いがあり、こんなところに本物のテイストがあったのかと Caliburn が教えてくれる。また、これはデジタル再生の代表とする ESOTERIC にとっても録音の品質を正確に出しているということのひとつの評価でもあるので誤解のないように追記させて頂く。とにかく Caliburn の高域は美しい。そして、その高域に人工的な匂いが一切しないことが私を驚かせた!!

更に、両者を比較して私の既成概念を突き崩したのがヴォーカルの質感だった。過去の LP レコードの再生でも、また CD による再生音でも同じ歌手の音がこうも違って聴こえたのには驚いた。たまたまりマスタリングによってエコー感を厚化粧したヴォーカルに終始ため息をついていたが、前述のようにアナログプレーヤーの構成要因のどこかに共振モードがあると、それはヴォーカルの質感と輪郭の再現性にも顕著に現れてくる。簡単に言えば輪郭が不鮮明で口許の大きさが聞き取れないほど肥大化してしまうというケースだ。

これも、アナログとはこんなふんわり感、浮遊感が楽しいものだから、という間違っただけの演出効果で CD との違いを強調するような場面がどこかにあったかもしれない。つまり、ヴォーカルをはじめとして中域で展開される最も多くの楽音と主題を受け持つパートの演奏部分のすべてにおいて、音像のフォーカスのあり方はデジタル再生優位という見方を私はしていた。なぜならば、機械的な変位による共振モードの影響がデジタル再生のループにはほとんどないからだ。ただし、これは CD プレーヤーのメカニズムの完成度にも関係するので、すべてにおいてというものではない。

しかし、ここでも Caliburn は逆転現象を起こしていた。曲によってはデジタル再生よりもヴォーカルをはじめとした音像の面積が小さく表現されるのである。これには驚いた。そして大切なことだが、小型化した音像にはちゃんと余韻感を含ませる潤いが再生音の中に存在しているのである。だから、聴きやすいし空間表現の大きさもきっちり認識できる。LP レコードの再生音に対する褒め言葉で「CD みたいな音」と私が冗談交じりに言っているが、本当に CD よりも音像が鮮明でフォーカスが合っていたら...、アナログ再生の常識がひっくり返ってしまうのだから言いえて妙な実感もある。皆さんの LP レコードに対する既成概念は間違いなく Caliburn を体験することで崩壊すること間違いなし!!



以上は私のコレクションの一部だが、ご存知の方も多いいことだろう。これらのインプレッションをすべて語るにはまだまだ気力と紙面が必要であり、それらで語る特徴と傾向もそろそろ出尽くした感がある。これからは実演して皆様に楽しんで頂ければということで、これ

以上の試聴レポートを続けて、読者の反感を買ってもいけないので、そろそろ締めくくりをしなければと思い始めた。

60 曲の比較試聴を終えて深夜に差し掛かり、本当に私が自分の趣味ということで楽しむために聴きたい一曲はこれ。1984 年実の父親に射殺されるという不遇の死を遂げながらソウルファンには永遠の名曲にして My favorite の「WHAT'S GOING ON?」だ。



当時 33 歳のマーヴィン・ゲイが 1972 年のグラミー賞を獲得した名曲であり、これもモータウンレコードの音質を私は誤解していたことを Caliburn が教えてくれた。私のビジネスの上で決して比較試聴やコンポーネントの検証には使用しなかった一曲。これを夜更けの試聴室でゆったりと味わってきた私は音質に付いて語ることはない。そう、音楽を聴いて満たされた気持ちはそっと生涯の記憶としておこう。それが...、もしかしたらアナログ再生の魅力かもしれない...!!

エピローグ

私が始めて Caliburn の存在を知ったのは「インターナショナルオーディオショー」を目前に控えた昨年夏ごろだったか。まさか、こんな超弩級のプレーヤーを手元で聴けるとは夢にも思っていなかった。いや、実際のビジネスになるかどうかという点で、あまりの価格に現実味が乏しいというのが本音であり、そんなものを展示しても客寄せにしかならないだろうと高をくくっていたものだった。

しかし、そんな私がビジネスのことを忘れてこれほど音楽を楽しむという時間を Caliburn が与えてくれたというのは正に原点への回帰としか言いようがない。この私でもだ...

こんな途方もない価格のプレーヤーをどうして輸入する気持ちになったのか、輸入元である [株式会社ゼファン](#) の代表取締役社長の西川 英章 氏に問い合わせたことがある。すると...

「私は 20 年以上前にはマイクロでアナログプレーヤーの設計をやっていました。当時自分が目指したものを完璧に実現してくれたのが Continuum のこれだったんです。それをこの時代の日本の皆さんに何としても紹介したかったから...」

そして、Continuum の初の製品に付けられたプライスは、過去に存在しなかったものをゼロから作り上げたことに対する代償でもある。そう、過去のテクノロジーを、コストをかけて発展拡大させてものではないということが価格の裏づけとなっている。

私でさえも販売の可能性に関してはどうなるかわからないものであり、当然西川社長といえども確固たる見通しはないものだ。しかし、その素晴らしさを知った情熱家の思いをより多くの人々に伝染させることは出来るだろう。そして、セールスの見込みだけにこだわらずに世界中の正にハイエンドと呼ばれるものを日本に紹介しようという英断にこそ、輸入商社としてのハイエンド思想とロマンチズムがあるのではなからうか。

オーディオ製品を分析評価することを生業としてきた私が、ここ数日間というもののいかに音楽を楽しんでこられたか。それは理屈ではなく、デジタルオーディオが世に登場する前に演奏され保存された膨大な音楽に対する hommage に他ならない。二度と買い戻せないブラッ

クディスクにこれほどの価値があったとは…。そうだ、過去に向き合い新しきものを発見できるもの。私と同じ体験を一人でも多くの皆様にお送りしたい。

Caliburn を通じて聴くアナログオーディオの世界は、未だにLPレコードの鑑賞に情熱を持っている人々はもちろんとして、デジタルオーディオしか知らない人々にもそれ以上の可能性を提示してくれることだろう。皆様が所有するLPレコードに新たな命を吹き込むことが私の、そしてCaliburnに与えられた使命でもある。さあ、果たしてCaliburnのオーナーとなる日本人が表れるのだろうか？ だとしたら何人になるのだろうか？ それはここでCaliburnの実際に接してみることで、そして自分の生涯とLPレコードの関係を見直し、今までに体験できなかったものを感じ取ることでしか購入動機を作り出すことは出来ないだろう。このCaliburnを導入するもしないも、アナログオーディオの究極のパフォーマンスに感動するというスタートラインにはどなたでもいっしょに並ぶことが出来る。そのためにCaliburnはここにやってきたものだ!!

それはLPレコードという先人が作り出した音楽の世界遺産に対して、その本当の価値とは何だったのかを同じく人類が作り出した最高の再生手段によって聴き取ることによって実感できるものだ。記録された年代から現在までの時間軸を一気に飛び越えて蘇る演奏と音質は、録音された当時の人々には想像もつかないほどのクオリティーであり、同じ演奏家・芸術家による同じタイトルの作品において、彼らが実現出来なかった再度の創造活動をCaliburnが行なったことになる。この意義は再生芸術であるオーディオには計り知れない価値となる。

芸術家のための芸術 “Art for artist” 私はこの一言を Continuum Audio Laboratories と Caliburn Analog Playback System に送りたい!!

謝辞

大変長い文章を最後までご精読頂き本当にありがとうございました。“感動の大きさに文章量は比例する”とは以前から私が述べていることですが、今回このように1,700万円もする超弩級のプレーヤーをご紹介させて頂くに当たり、私の日頃の仕事量と許される時間に限界があるということを感じてしまいました。つまり、このプレーヤーで聴くLPレコードのすべてに新たな感動と発見があり、それは試聴枚数を重ねれば重ねるほどに新鮮な驚きを発見し続けるためにきりが無い…、という状況を自覚してしまっただけからです。ここに至っては、ある程度の文章量で締めくくりをしなければという思いがあり、今回はちょうど30ページというところで幕引きとさせて頂きますが、時間が許されれば試聴感想文としてはまだまだ続けたいというのが本音です。そして、日々の新製品の登場と以前から展示しているコンポーネントたちの融合から更に新しい感動が生まれてきていますが、悲しいかな私の時間が追いついていかず、すべてをこの「音の細道」で語っていくことが出来ない状況です。そんな意味では今回の試聴でもリファレンスとして活躍した [Avalon Acoustics “Isis”](#)などを詳しくご紹介できないのは大変残念なことで、これは近年ここに持ち込まれる新製品の数が大変多くなってきたということなのです。しかし、その反面で私の文章量を全く気にしなくても良いという事実があります。そう!! 聴いて頂ければお分かり頂けるという実演のステージが私にはあるということです!! 入場無料のこのステージは全国のすべての皆様に解放しています。唯一の条件は、ただ音楽を愛しているということだけ。さあ、皆様も感動のステージへどうぞ!!

〔完〕

2006年8月吉日 Dynamic audio 5555 店長 川又利明